

4 スポーツ



	資料名	主 題	作成者（所属校）
(1)	「ゆめにむかって ー栗原恵選手のゆめー」	ゆめにむかって	中下 正美(江田島市立高田小学校)
(2)	「強いものは美しい ー日本人初の金メダリスト 織田幹雄ー」	夢を実現させるために	税所 正紀(海田町立海田小学校)
(3)	「今を一生懸命 ー日本女子体操を支えた池田敬子ー」	夢を追い求めて	平松 理恵(三原市立西小学校)
(4)	「心のたすきをつなぐ」	集団の役割と責任の自覚	重森恵美子(世羅町立大田小学校)
(5)	「風を感じて ー侍ハードラー 為末大ー」	生きる喜び	鍵山 員子(広島市立瀬野川中学校)



教材活用例(1)「ゆめにむかって―栗原恵選手のゆめ―」

〔小学校中学年 主題：ゆめにむかって 内容項目：1の(2)〕



(1) 開発資料の実際

ア 素材の説明

(ア) 素材の概要

〈素材―栗原恵さん―について〉



栗原恵さんは、江田島市能美町出身のバレーボール選手である。全日本(火の鳥NIPPON)チームの副キャプテンを務めるなど活躍している。

小学校4年生からバレーボールを始め、高校時代にはインターハイ・国体・春のバレーに優勝し、三冠を達成した。さらに夢であったアテネ、北京のオリンピックにエースアタッカーとして連続出場し、それぞれ5位入賞を果たすなど多くの実績を残している。

昭和59年 (1984年)	佐伯郡能美町(当時)に誕生
平成10年 (1998年)	兵庫県大津中学校に転校
平成12年	山口県三田尻女子高校に進学 インターハイ・国体・春高バレー優勝の高校三冠
平成14年	高校3年、全日本代表メンバーに選出
平成16年	アテネオリンピック5位入賞
平成18年	左足種子骨骨折の診断、約半年間リハビリ生活
平成19年	全日本復帰、ベストスコアラー部門9位
平成20年	北京オリンピック5位入賞
平成21年	全日本(火の鳥NIPPON)の副主将
平成22年	世界バレー銅メダル

栗原恵さんの経歴

(イ) 4コマ絵

夢に向かって進んでいくために、大きな決断をしなければならない主人公恵さんの葛藤場面を中心に構想した。その中で、補助的な人物としてお父さん、お母さんを設定した。幼い頃から恵さんに厳しくバレーを教え、その基礎をつくったお父さん。悩んでいる恵さんの話を聞き、後悔しない進路を決めるように話すお母さん。

	1	2	3	4
場面のイメージ絵				
絵の説明	小さい頃からお父さんとバレーボールの練習をする。バレーボールが大好きな恵さん。	小学校でスポーツ少年団に入り、バレーボールを楽しみながら、練習に励む恵さん。	バレーボールの強い学校から転校の誘いがあり、進路について迷う恵さん。	悩んだ末、転校を決意し、夢を果たしてオリンピック選手になった恵さん。

イ 資料の解説

【作成の要点】

小学校学習指導要領解説道徳編では、夢や希望について、「児童が自立し、よりよく生きていくためには、(中略)何事にも粘り強く取り組み、努力し続ける忍耐力も求められる。しかし、それは見通しもなく取り組むのではなく、よりよい自己を実現しようとする向上心と結び付いてこそ、前向きな自己の生き方が自覚されてくるといえよう。そのためにも、児童がより高い目標を立てたり、自分としての夢や希望を掲げたりして、その達成や実現への志をもち、勇気をもって取り組むことができるようにすることが重要になる。」とある。

また、中学年の段階においては、「自分がやらなければならないことだけではなく、更に自主性を発揮し、自分でやろうと決めたことに対しても積極的に取り組み、粘り強くやり遂げる精神を育てることが大切になる。そのためにはあきらめずに取り組むことの意義や、今よりよくなりたいと願い、努力しようとする姿について考えを深めていくことが求められる。」とある。「心のノート」の関連ページには、キーワードとして『今よりよくなりたい』という心をもとう」と示されている。

これらを踏まえ、「栗原恵選手」を素材として資料を作成するに当たっては、夢や希望を焦点化し構想することが大切であると考えた。児童に、自分が好きなこと、夢にむかって前向きに生きていくことのすばらしさを感じ、そのために努力していこうとする気持ちを育てていきたい。そこで、転校を決めるときの恵さんの思い悩む姿を中心場面として設定した。



【心に響くちょっといいはなし】

恵さんは、とてもがんばりやさんであった。ペン習字、ピアノ、習字とバレーボール以外の習い事もしていたが、やりだしたらやめない子であった。泣くのもよく泣いていたが、できない悔し涙、思い通りにならない涙で、やめる涙ではなかったとお母さんは語る。

中学校2年生の転校は本人に選ばせた。でも、心配なご両親は、会いに行く度、恵さんが『帰りたい。』と言ったら連れて帰ろうね。」と話していたそうである。がんばっているのがわかっていたから、「がんばれ。」とは言わず、「もういいよ。休んでいいよ。」と声をかけていたそうである。やめないのは分かっていたから出来たのかもしれないと話されていた。

ウ 資料全文

「ゆめにむかって」 ―栗原恵選手^{くりはらめぐみせんしゅ}のゆめ―

「ヤッホー。私の今のゆめはバレー選手なんだけど……。 バレーをつづけていますか？

12才の恵より」

今、活やくしている恵さんは、しょう来の自分にこんなメッセージを書きました。テレビで全日本選手のすばらしいプレーを見て、自分もバレー選手になって、見ている人の心にのこるプレーをしたいと思ってえがいたゆめ。恵さんは、このゆめをかなえたのです。

恵さんは江田島市能美町^{えたじましのうみちょう}の出身です。お母さんは、小学校のママさんバレーの選手、お父さんはそのチームのかんとくでした。「恵は、赤ちゃんのころからボールで遊んでましたよ。」と、お父さんが言うように、バレーに親しんで育ちました。小学校に上がる前から、にわでパスの練習をするくらい、バレーが大すきな女の子でした。お父さんと練習をしている時、うまくできないと、

「ボールをよく見て。」

「うんわかった。」

「手をのばして。」

「できないよ。」

「ああ、もう、そうじゃない。」

「できない。もうやらない。」

と言ってケンカになり、恵さんはできないことがくやしくて、練習をやめてしまいました。でも、次の日になると、

「お父さん、いっしょに練習しよう。」

と、にっこりわらってお父さんをさそうのでした。

恵さんが本かくてきにバレーを始めたのは、小学校4年生の時。スポーツ少年だんに入ってからでした。せの高さを生かして、スパイクをうちました。それが楽しかったので、家でも毎日練習していました。

恵さんは、学校のそつ業文集にバレーのことを書いています。

私の1番の思い出は、バレーのことです。

大会2日目の相手は、力が私たちよりもすごいです。やってみても強い。でも、みんなでカバーし合ってボールをつなぎ、やっと勝てました。みんなの力です。

そして次の相手は、何でもかんぺきなチーム。なかなかサーブがとれません。声をかけ合って、ねばり強くとりにいきましたが、負けてしまいました。試合の終わりのふえが鳴るとガックリ……。ガックリといっしょに、くやしみだが出てきました。

B級の3いだったけど、自分たちにまん足です。それは、とっても楽しいし合ができたからです。今まで練習をがんばったから、3セットまでねばることができました。このし合のことは、ぜったいわすれません。みんなやればできるということがよく分かったので、このし合をはげみにして、これからもずーっとバレーをつづけていきたいと思います。

恵さんは、中学校でもまよわず、友だちと楽しくできるバレーをつづけました。

そんなある日、ほかの県の強くて有名な学校から、転校してバレーをやらないかというさそいがありました。

(バレーのことだけを考えれば、練習がきびしくてもやってみたい。やればもっと上手になれる。)

(転校すれば、大すきなお父さん、お母さん、お兄ちゃんとわかれて、たった一人の生活になってしまう。)

(小学校からずっといっしょにバレーをしてきた、なかよしの友だちとも会えなくなる。)

どうしてよいかわからず、恵さんはなみだがとまりませんでした。なきじやくるすがたを見て、お父さんは、「バレーをやりたいのは、わかるよ。でも、そんなにないてまでバレーをするのか。できるのか。」と言いました。思わず、

「ううん、行く。ぜったいに行く！」

とこたえた恵さん。その時に、

(そうだ。私は、ぜったいにバレーがやりたいんだ。)

という気持ちがわかったのです。

その日の夕方、お母さんと恵さんはいつものように食事のじゅんびをしていました。その時、恵さんはうつむいて、大つぶのなみだをこぼしながら、

「転校してから、しなければよかったと思うかもしれない・・・。」

と、ぼつりとつぶやきました。お母さんは、

「めぐ、あなたはどうしたいの？ 自分がどうしたいか、よく考えてごらんなさい。」

と、やさしく言葉をかけてくれました。

その夜、恵さんは、部屋で一人じっと考えました。

そして、次の日の朝、ふすまを静かに開け、

「私、やっぱり行く。」

と、お父さんお母さんに言いました。恵さんは、転校することを決めたのです。

こうして、恵さんはゆめにむかって第一歩をふみ出しました。

恵さんのその後の主な活やく

1998年：ひょうご県の中学校に転校する。

2000年：山口県の高校に進学する。

2002年：高校三年生の時、全日本代表にえられる。

2004年：アテネオリンピックに出場し、五位入賞をはたす。

2008年：北京（ペキン）オリンピックに出場し、五位入賞をはたす。

2009年：全日本(火の鳥 NIPPON)の副主将になる。

恵さんの今のゆめ。それは、いつかバレーをやめるとき、「バレーをやっていて本当によかった。」とえ顔でむねをはって言えること。そして、自分が小さいころにバレー選手になりたいというゆめをもったように、今の自分を見てバレー選手をめざす子どもたちに、ゆめをあたえてあげられるようにすること。

恵さんのゆめは、まだまだつづいています。

【参考文献】

栗原恵(2008) 「めぐみ」 実業之日本社

日本ドリームプロジェクト(編)(2009) 「アスリートの夢 26人のアスリート×きむ」 いろは出版

エ 授業展開例 ー学習指導案（略案）ー

恵さんの迷い、人間的な弱さを中心にした展開
～ 書く活動を生かした指導 ～

(ア) 主題名 ゆめにむかって 1－(2)

(イ) ねらい 転校を決めるときの恵さんの気持ちを考えるを通して、自分の好きなこと、ゆめにむかって前向きに生きていくことのすばらしさを感じ、そのために努力していこうとする気持ちを育てる。

(ウ) 資料名 「ゆめにむかって ー栗原恵選手のゆめー」

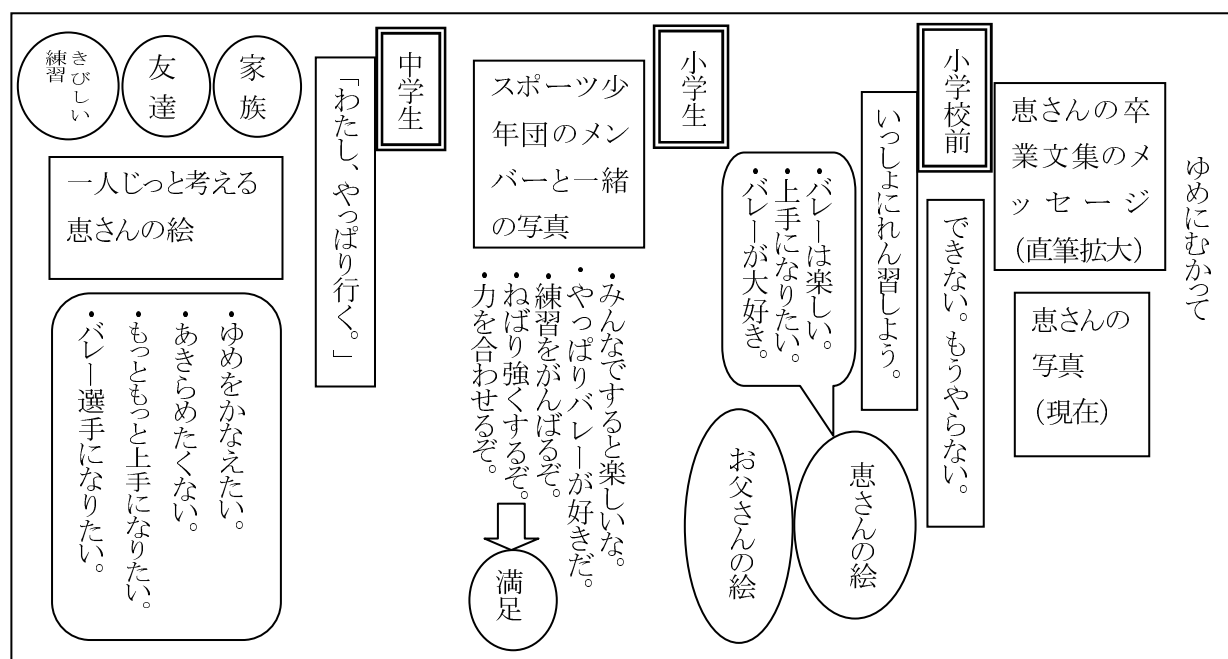
(エ) 学習指導過程

	学 習 活 動	主な発問と児童の心の動き	留 意 点 (☆評価の観点)
導 入	1 教室の天井の高さと栗原選手の最高到達点を比べる。	○ 教室の天井の高さはどれくらいでしょう。 (栗原選手の最高到達点を知らせる。) ・高いなあ。 ・すごい。 ・あんなに跳べるんだ。	○ 栗原選手の最高到達点 305 cm (身長 186 cm) であることを告げ、栗原選手への関心を高める。 ○ 栗原選手の活躍の様子も簡単に知らせる。
展 開	2 「ゆめにむかって ー栗原恵選手のゆめー」を聞いて、話し合う。 3 自分の夢（目標）と努力を振り返る。	○ 「できない。もうやらない。」と言って練習をやめるのに、次の日には、また始める恵さんは、どんな気持ちだったのでしょうか。 ・今やめたら、ずっとできない。 ・できないのはくやしい。 ・できるようになりたい。 ・やっぱり、バレーが大好き。 ○ スポーツ少年団で、恵さんはどんな気持ちでバレーをしていたのでしょうか。 ・みんなでするバレーは楽しい。 ・練習をがんばって、ねばり強くボールを取りに行くぞ。 ・みんなで力を合わせて、試合をがんばった。 ・負けたらくやしいけれど、がんばったから自分たちの試合に満足だ。 ・これからもずっとバレーを続けていきたいな。 ◎ 恵さんは、どんなことを考えて「わたし、やっぱり行く。」と言ったのでしょうか。 ・家族と離れるのは寂しい。でも、私は、バレーが好きだ。がんばりたい。 ・不安だけど、もっと上手になって、バレー選手になるぞ。 ・できるところまで、がんばってみたい。 ○ あなたの今の夢（目標）は何ですか。どんなことをがんばっていますか。 ・サッカー選手になりたい。だから、練習は休まずに行っている。	○ 話が分かりやすいように、資料は3つに区切って提示する。 ○ 中心発問につなげるために、「できるようになりたい、バレーが好き。」という気持ちを押さえる。 ○ みんなでバレーをする楽しさが今の恵さんにつながっていること、結果よりも、一生懸命練習をしたこと、自分たちががんばったと思えること、力を出し切ることが満足感につながることを感じさせる。 ○ 迷う恵さんの気持ちを確認し、転校を決めた根底には、「バレーが好き、上手になりたい。」という変わらない思いがあることをとらえさせる。 ☆ 書く活動を通して、迷いながらも自分の夢を果たすために前向きに生きる恵さんの思いについて、自ら考えを深めることができたか。
終 末	4 恵さんが今の夢を語っている資料映像を見る。	・夢を持続しているんだな。すごいな。 ・「人にアドバイスできる大きな人」というのも夢なんだな。	○ 恵さんの今の夢を聞き、夢をもつことのすばらしさとそのための努力の大切さを感じさせる。

資料場面	登場人物の行・心情		主人公の心情	児童の意識の流れ
	中心人物（恵ちゃん）	その他の人物 （英母さん・英父さん）		
○小さい頃からお父さんがバレーをすすめる。恵が大好きな恵が、さ	・バレーの練習中うまくできなくて、「でもないよ」と言われて、練習をやめてしまおうか、と悩んでいた。笑顔で練習をした。	・恵ちゃんと通いのようにバレーの練習をした。（お父さん）	お父さんと英母さん ・できなかった。 ・やさしい。 ・バレーは楽しい。 ・上手になりたい。 ・バレーが好き。	○恵ちゃんは、小さいころからバレーが大好きだった。 ○上手になりたいと思った。 ○練習がんばった。
○小学校でスポーツ少年団に入り、年々練習し、楽しみながら練習に励む恵さん。	・小学校4年生からバレーを始め、毎日練習していた。 ・ずっとバレーを続けていきたいと考えていた。		スポーツ少年団に入る ・みんな楽しそう。 ・自分も頑張りたい。 ・力があつていい。 ・自分ががんばる。 ・自分も頑張りたい。 ・自分も頑張りたい。	○私と同じくらいバレーを始めたんだ。 ○スポーツ少年団で練習したんだ。 ○練習がんばって、食べても満足。 ○いっしょにやっている。
○中学生になって、強い学校の話があり、迷う恵さん。	・中学校でも楽しくバレーを続けたい。 ・転校の話があり、悩んだ。 ・やればもっと上手になれる。 ・人の生活にならなくて、友達とも仲良くなると考え、迷った。 ・どうしてよいかわからない。 ・「転校したら、しなげられようか」と思ったり、悩んだり。 ・部屋で一人じこと考えた。	・「そんなになんか、バレーをするのか？」と悩んでいた。 ・「恵ちゃん、声をかけてあげよう。」 ・「恵ちゃん、声をかけてあげよう。」 ・「恵ちゃん、声をかけてあげよう。」	転校について悩む ・嫌いなところがある。 ・新しい環境に慣れない。 ・友達と会えない。 ・新しい友達を作りたい。 ・新しい友達を作りたい。 ・新しい友達を作りたい。	○家族、友達、練習のことまで考えて、恵ちゃんはすごく悩んだ。 ○家族と離れるなんて、すごく寂しい。 ○友だちと会えなくなるのが怖い。
○転校を決意し、バスケットボール選手として活躍する恵さん。	・「わたし、やっぱり行く」と決心を固く心に伝えた。		転校を決心 ・新しい環境に慣れない。 ・新しい友達を作りたい。 ・新しい友達を作りたい。 ・新しい友達を作りたい。	○すごく悩んで決めたんだ。 ○もっと上手になりたいという、強い気持ちがあったんだ。 ○夢がかなえるために、決めたんだ。
○今も夢を持ち続ける恵さん。	・バレーをやっていると、いつかプロ選手を目指すと、子どもたちに夢を手伝ってあげられるように、新たな夢をもつ。		今の夢 ・バレー選手をめざす。 ・バレー選手をめざす。 ・バレー選手をめざす。	○夢はまだ続いている。 ○バスケットボール選手になることが、夢である。

(才) 資料分析表

(カ) 板書例



【板書の構成】

板書は、短冊や色チョークなどを活用し視覚に訴えるなど、児童の思考の助けとなるよう心がける。

本資料は、恵さんの小さいころ（小学校前）、小学生、中学生と長い時間の出来事を表しているので、どのときのことか分かりやすいように、短冊で示す工夫をする。

恵さんの言葉「できない。もうやらない。」は青字で下、「いっしょに練習しよう。」を赤字で上に示し、恵さんの気持ちをよりはっきりとした板書にする。

また、小学生のころの「練習をがんばるぞ。」「ねばり強くするぞ。」が満足につながることを赤字で示し、結果よりも、一生懸命練習をしたこと、自分たちががんばったと思えること、力を出し切ることが満足感につながることを感じさせる。

中心発問の「わたし、やっぱり行く。」と言う言葉は、短冊の色を変え、しっかり考える場面であることを意識させる。

ゆめにむかって

名前)

(

☆めぐみさんは、どんなことを考えて「わたし、やっぱり行く。」と言ったのでしょうか。

--	--	--	--	--	--	--



(2) 活用のポイント

発問は、恵さんの言葉や行動の裏側にある気持ちを問うことで、今よりよくなりたいと願い、努力しようとする姿について考えを深めていき、ねらいに迫っていきたい。

中心発問では、書く活動を取り入れる。恵さんも悩み、それを乗り越えて夢を実現させたことから、その人間的弱さや葛藤についてしっかり考えさせ、児童の多様な思いを引き出したい。

終末では、バレーボール選手になって夢が終わりということではなく、夢をもち続け、努力し続けることのすばらしさを感じさせたい。そして、「自分もがんばるぞ。」という気持ちを高めるものとしたい。

現在活躍中の選手なので、写真や映像を活用し、そのすばらしさを感じさせると共に、そのもとになるのは小さい頃に思い描いた夢や希望とその実現に向けた努力であることを合わせて感じさせたい。

ア 発問の工夫

恵さんが転校を決めた根底には「バレーが好き、上手になりたい。」という、小さい頃からの変わらぬ思いがあることを捉えさせたい。そこで、初めの発問で、小学校にあがる前からバレーボールの練習を楽しんでやっている恵さんの気持ちを考えさせ、小学校では、みんなでバレーボールをする楽しさを感じていること、結果よりも一生懸命練習したこと、自分たちががんばったと思えること、力を出し切ることが満足感につながっていることを感じさせ、中心発問につなげたい。中心発問は、恵さんが葛藤しながら転校を決める場面とする。

展開後段では、事前に子どもたちの夢や目標について、アンケートで実態を把握しておく。好きなことを自分もがんばっている、これからもがんばろうという気持ちを育てることでねらいに迫りたい。

イ 書く活動の工夫

好きなバレーボールを続けたい、もっと上手になりたい、そのために、決断し努力する恵さん。恵さんも悩み、それを乗り越えて夢を実現させたことから、その人間的弱さや葛藤を一人一人が自

分の言葉で書くことにより、しっかり考えさせる。そして、夢をもってがんばろうとしている恵さんの姿を通して、目標をもってチャレンジする気持ちを育てたい。

ウ 終末の工夫

終末では、今の夢を語る恵さんの映像を視聴したり、資料最後の「恵さんの今の夢」を、音楽をかけながら読むことも考えられる。

また、運動会、持久走大会等の行事と関連させた終末も考えられる。各行事の様子を映像で見せることにより、努力しやり抜くことができる自分であること（自己肯定感）に自信をもたせ、「もっとよくなりたい。」という気持ちを高めていくこともできる。

エ 実物・視聴覚機器などの活用

資料のはじめは、恵さんの小学校の卒業文集に書かれたメッセージ（「将来の自分へ」）なので、直筆のメッセージを児童に見せることで、より興味がわくのではないかと考える。また、ユニホーム姿、試合の様子などを見せることで、夢をかなえたすばらしさ、そのための努力の大切さを感じさせたりしたい。

(3) 授業の実践 ―児童・生徒の反応から―

ア 発問の工夫

導入では、恵さんのジャンプ最高到達点（305cm）を実感させるために天井の高さをたずねた。児童は「すごい。」という驚きを感じ、資料への興味付けができた。

恵さんのその後の主な活躍を導入段階で紹介することで、大変興味をもち、よかった。また、資料を読むことを省略することができ、展開の時間確保に役立った。

本資料は中学年の児童にとっては、少し長いことから資料はいくつかに区切って提示したが、児童にとっては資料に入り込みやすく分かりやすかったようである。小学校4年生の時バレーを始めたことが書いてあるところでは、子どもの表情が変わり、より恵さんが身近に感じられていた。

展開後段では、アンケートをとっているのもので、様々ながんばりを紹介するために、意図的指名を

した。児童は自分のがんばりを発表し、認められることで「これからも続ける。」と、意欲を高めることができていた。

イ 書く活動の工夫

中心発問では、すぐにワークシートに書くのではなく、転校したら何を後悔するかを確認した。児童からは家族と別れる不安が多く出てきたが、友達との別れ、行っても足を引っ張るかも、練習がきびしいからできないかも等、不安の中身も多様に出てきた。

【児童のワークシートから】

- ・友達や家族と別れるのはさびしいけど、自分はバレーが好きだから。バレーが今よりもっと強く、もっと上手になりたいから。
- ・自分自身の夢を考えて、好きなバレーを大人になっても続けたい。
- ・有名な中学校で練習をがんばって、強くなったところを見せたかったから。
- ・友達とは会えないけど、夢は今しかかなわないから転校することにした。
- ・バレーが好きだから、きびしい練習もがまんして、バレーを上手になりたい。強くなりたい。

ウ 終末の工夫

資料後半のめぐみさんの今の夢を読むことで、「あっ、夢は一生涯続くんじゃない！」という声が出た。夢をもち続けることのすばらしさを感じることができたと考える。

そして、恵さん自身が今の夢について語っている映像を見せることで、バレーボール選手になった今も新たな夢をもち続け、努力し続ける恵さんのすばらしさに触れ、夢をもつことのすばらしさとそのために努力することの大切さを感じさせることができた。

エ 実物・視聴覚機器などの活用

資料のはじめは、恵さんの小学校の卒業文集に書かれたメッセージ（「将来の自分へ」）なので、直筆のメッセージを子どもたちに見せた。

直筆のメッセージや小学校時代の写真で、「ほんまに書いたん？」「背が高い！」などの言葉が自然に出てきており、児童の興味・関心を一層高

めるのに効果的であった。

終末の映像も、興味をもって視聴することができており、効果的であった。

（４）各教科等（体験活動を含む）との関連

○ 学級活動

授業後、４年生で行う「１／２成人式」の取組で、自分の夢や目標を語り、そのためにどんなことをしているかということを発表する場を設定する。保護者への発表の場等を工夫することで、児童の努力しやり抜く気持ちを、さらに高めていく。

○ 各行事等

運動会、合奏発表、図画選奨会、持久走大会等、目標をもってやり遂げる行事と関連させ、努力しやり抜くことができる自分であること（自己肯定感）に自信をもたせ、「もっとよくなりたい。」という気持ちを高めていく。

（５）心のノートの活用

○ 学級活動で「心のノート」PP. 16-19 を活用する。

「目標をもってやりぬく」に自分の目標を書き、自分をふり返る機会とする。「１／２成人式」に向け、自分の夢や目標を再確認する。

P. 18 の「続けるひけつ」を家族や先生、友達に聞かせ、意欲化を図る。

○ 帰りの会で「心のノート」P. 19 を活用する。

持久走大会を前に、自分の目標達成のためにやることを決めさせ、15日間、表に記入させる。この他に、生活や学習についてもその都度、目標を決めさせ、取り組ませる。がんばっている自分や、友達を認めながら取り組むことができる。



【参考】低学年資料

「わたしの いちばんの おうえんだん」

わたしの なまえは くりはら めぐみ。 えたじましで うまれて そだちました。いまは せんだいという ところに すんで、バレーボールせんしゅを しています。そして、せかいのチームと しあいを しています。

わたしは、 うまれたとき 3950グラムの おおきな あかちゃんでした。「めぐみ」という なまえは、おとうさんが つけてくれました。しあわせに めぐまれますように、ともだちに めぐまれますように いろんなことに めぐまれますように、という ねがいが こめられています。わたしは この なまえが だいすきです。

わたしは ちいさいころから、バレーボールで あそぶのが すきでした。おとうさんと バレーボールの れんしゅうを している ときの ことです。

「ボールを よく みて。」

「うん、わかった。」

「てを のばして。」

「できないよ。」

「ああ、もう、そうじゃない。」

「できない。もうやらない。」

といって おとうさんと よく けんかに なりました。わたしは おこって、れんしゅうを やめました。

でも、つぎの ひには、

「おとうさん、いっしょに れんしゅうしよう。」

と、いいました。おとうさんは、にこっと わらって、

「よし、やるか。」

といって すぐに れんしゅうを してくれました。

わたしの だいこうぶつ、それは おかあさんが つくってくれる グラタンや クリームシチューです。おさしみも だいすき。こうばしい カキごはんや カキフライも。おかあさんの つくるものは なんでも おいしいと おもいます。

わたしが せんだいから かえると おかあさんは すきなものを テーブル いっぱい よういして くれます。たべきれない ぐらいです。わたしが ぱくぱく たべるのを、おかあさんは ずっと みています。

「やっぱり、おかあさんが つくったものは さいこう！」

というと、おかあさんは にっこり わらって、

「ありがとう。」

といいます。わたしも

「ありがとう。」

といって、ふたりで めを あわせて、また わらいます。

しあいが あるとき、おとうさん おかあさんは いつも おうえんに きてくれます。わたしは ふたりの かおを みると、がんばる きもちが わいてきます。おとうさん、おかあさんは わたしの いちばんの おうえんだんです。

恵さんを思う家族の愛を中心にした展開
～ 役割演技を通してねらいに迫る ～

(ア) 主題名 大好きなかぞく 4－(3)

(イ) ねらい お母さんと二人で目を合わせて笑っているときの恵さんの気持ちを考えることを通して、家族を大切に思い、自分のことを考えてくれていることに感謝する気持ちを育てる。

(ウ) 資料名 「わたしのいちばんのおうえんだん」

(エ) 学習指導過程

	学 習 活 動	主な発問と児童の心の動き	留意点 (☆評価の観点)
導 入	1 栗原恵さんについて知る。	○ 恵さんてすごいな。 ○ 世界のチームと戦って、すごいな。	○ 写真や、映像を見せることで、興味付けをする。
展 開	2 「わたしのいちばんのおうえんだん」を聞いて、話し合う。 3 自分の生活を振り返る。	○ お父さんは、どんなことにめぐまれる（いっぱいある）ように「めぐみ」となまえをつけたのでしょうか。 ・友達がいっぱいいる。 ・いいこと（幸せ）がいっぱいある。 ・お金がいっぱいある。 ・勉強がよくわかる。 ・病気をしないで元気に大きくなる。 ○ バレーボールの練習を「よし、やるか。」と言われたとき、恵さんはどんな気持ちでしょう。 ・やっぱりお父さんは、やさしいな。 ・お父さん、大好き。 ・お父さんとバレーをすると、楽しい。 ◎ お母さんと二人で目を合わせて笑っているとき、恵さんはどんな気持ちでしょう。 ・お母さんは、わたしのためにつくってくれたんだ。ありがとう。 ・お母さんの料理は、どれもおいしいな。 ・好きなものばかり作ってくれて、うれしい。 ・お母さん、大好き。 ○ 家族がいてよかったなと思うのは、どんなときですか。	○ お父さんは、どうしていろいろなことに恵まれた方がいいと思うのか、その思いで名付けてもらった恵さんの気持ちはどうかを問い、お父さんへの感謝、好きという気持ちを出させる。 ○ 教師が母親役、児童が恵さん役になり、役割演技をすることで、多様な思いを出させる。 ○ 料理を作って待つお母さんの気持ちも問うことで、恵さんのことを大切に思う気持ちも押さえる。 ☆ 役割演技を通して、主人公の家族に対する感謝の思いを自分に引きつけて表現することができたか。
終 末	4 自分の名まえにこめられた親の思いを知る。（手紙を読む。）	・こんな思いで、名前をつけてくれたんだ。 ・ぼくのことをすごく考えてくれているんだな。	○ 家の人に、子どもの名まえの意味について、手紙を書いてもらう。

教材活用例(2) 「強いものは美しい」



—日本人初の金メダリスト ^{おだ みきお} 織田幹雄—

〔小学校高学年 主題：夢を実現させるために 内容項目：1の(2)〕

(1) 開発資料の実際

ア 素材の説明

(ア) 素材の概要

〈素材 —^{おだ みきお}織田幹雄さん— について〉



晩年の織田幹雄さん

織田幹雄さんは、日本人で初めてオリンピックで金メダルを獲得した。そこに至るまでには、大きな怪我、記録の伸びない時期など幾多の困難を経験してきた。しかし、それに負けることなく、陸上一筋に努力を続け、現役を退いた後も、生涯陸上に深くかかり、日本陸上界に大きな功績を残された。

明治38年 (1905年)	広島県海田市町(現安芸郡海田町)で誕生
大正13年 (1924年)	第8回オリンピックにて、三段跳び6位入賞
大正14年	早稲田大学入学
昭和3年 (1928年)	第9回オリンピックにて、三段跳びで優勝
昭和6年	大阪朝日新聞社のスポーツ記者となる
昭和7年	第10回オリンピックでは、足の故障で予選落ち
昭和39年	第18回オリンピック(東京)の日本陸上チーム総監督
昭和42年	第1回織田幹雄記念陸上大会の開催(広島)
平成10年 (1998年)	享年93歳で没

織田幹雄さんの経歴

(イ) 4コマ絵

史実に基づいて経歴を整理した。そして、幹雄さんの考え方や生き方が表れ、人間的魅力が伝わるエピソードを中心場面とし、4場面の構成とした。

	1	2	3	4
場面のイメージ絵				
絵の説明	中学校時代、オリンピック選手の講習会に参加した幹雄さんは、陸上競技と出会う。「練習すれば日本を代表する選手になれる。」という言葉を引きかけにどんどん陸上競技にのめりこんでいく。	人一倍努力を続ける幹雄さんはやがていくつもの大会で優勝を重ねる。 やがて、日本を代表する選手になった幹雄さんは、オリンピックにも出場し、世界第6位に入賞する。幹雄さんは、次のオリンピックに向けて、大きな目標を立て、今まで以上に努力を続ける。	オリンピックに向けて、努力を続ける幹雄さんだったが、思うように記録が伸びない。 それどころか、大きな怪我に見舞われてしまう。 最初は大きな期待をしていた周りの人たちも限界説をささやき始める。練習を終えた幹雄さんは「今日も記録が伸びなかった。」とつぶやき、一人夕日の前にたたずむ。	新たな練習方法に気付いた幹雄さんの記録がまた伸び始めた。2度目のオリンピックに出場した幹雄さんは、日本人初の金メダルを獲得した。

イ 資料の解説

【作成の要点】

海田小学校の児童に、「学校の自慢はなんですか。」と問うと、ほとんどの児童が、「織田幹雄」を挙げる。児童にとって「織田幹雄」は、身近な存在であり、自分たちの誇りでもある。このことから、児童の心に響き、魅力的で多様な授業を展開するための素材として最適であると考えた。

織田幹雄さんの「日本人初の金メダリスト」という栄光は誰もが知っている。しかし、その栄光を勝ち取るまでには、多くの人に知られていないチャレンジ精神、力強い生き方、苦悩などがある。それらに焦点を当て、内容項目を不撓不屈〔1の(2)〕として作成することとした。

織田幹雄さんについて、書籍、インターネット、インタビュー等から様々な情報を得ることができた。それらをすべて伝えたいと思い、得た情報をできるだけ文章に盛り込んでいった。何度も推敲する中で、何を一番子どもたちに伝えたいか考え、焦点を絞り、中心場면을膨らませ、他の部分を削る作業を行った。

地域教材を作成する中で、織田幹雄にまつわる実際に使用したものに出会った。本資料の表題でもある「強いものは美しい」という座右の銘を記した直筆の色紙、試合などで使用したスパイク、試合や練習の様子を記録したノート等が残っていた。それらを授業の中にうまく取り込むことができるように、実際の授業を想定しながら作成した部分もある。



【心に響くちょっといいはなし】

今回の作成にあたり、いろいろな方と織田幹雄さんに関する話をする機会があった。海田町教育委員会の方、地域の方、本校校長、昔海田小学校に勤めておられた方たちの話を聞く中、想像していた以上に織田幹雄さんに対する熱い思いが伝わってきた。海田小学校の先輩とか、日本人初の金メダリストということだけでなく、織田幹雄さんの生き様に対して、誇りをもっておられた。個人的に記録や情報を収集されている方。「織田幹雄センベイ」を販売されている店。海田町全体の熱い思いを授業や資料を通して、子どもたちに伝えることができたならなんと素晴らしいことだろうと考えた。私自身も取材や資料収集、資料の作成を通して織田幹雄さんの生き様に魅了され、いつしかファンの一人になっていった。

ウ 資料全文

強いものは美しい ―日本人初の金メダリスト 織田幹雄―

海田町立海田小学校には、織田幹雄さんの
オリンピック金メダル受賞を記念して、15メートル
21センチの長さのポールが立てられています。



明治38年、広島県海田市町（現在の安芸郡海田町）に生まれた織田幹雄さんは、小さいころから
野山を駆け回る元気いっぱいの子どもでした。

運動が大好きだった幹雄さんが陸上に出会ったのは広島一中（現在の広島県立国泰寺高等学校）の
二年生の時でした。ある日、教官から、第7回オリンピックに出場した野口源三郎さんの講習会に参加
するようにすすめられました。幹雄さんの当時の身長は、155センチでしたが、なんと高跳びでは、
自分の背丈より高いバーを跳び越えたのです。それを見ていた野口さんが、
「小さいのによく跳ぶね。君は練習すればきっと日本の代表になれるぞ。」
と、声をかけてくれたのです。幹雄さんは、顔を真っ赤にして聞いていました。

そして、中学四年生の新学期、サッカー部をやめ、新しくできた徒歩部（陸上部）に入部しました。
できたばかりの広島一中の徒歩部には、指導者もコーチもいませんでした。幹雄さんは、自分で本屋
を歩き回り、数少ない跳躍に関する雑誌を参考に自分で工夫しながら練習を続けました。昼休みの鐘
が鳴るとすぐに運動場を走り、放課後は最後まで練習していました。友だちが

「もう帰ろう。」
と言っても、
「もう少しやってから帰る。」
と言って断りました。

誰もいなくなった運動場で、黙々と一人で練習を続けました。気がつくとも一番星が輝いていること
もたびたびでした。休みの日も裏庭の小さな砂場で朝から晩まで練習に励みました。

やがて幹雄さんは、いろいろな大会の「走り高跳び」「走り幅跳び」「三段跳び」などで優勝を重ね、
注目されるようになりました。

そして、第8回オリンピックに出場し、三段跳びで14メートル35センチの日本新記録を出し、日
本陸上史上初の世界第6位入賞を果たしました。「すばらしい。」と誰もがその入賞を喜んでくれまし
た。オリンピックが終わって、幹雄さんはすぐに次のオリンピックに向けて目標を立てました。

さらに幹雄さんの厳しい練習の日々がスタートしました。しかし、記録はなかなか思うように伸び
ませんでした。それどころか練習を続けるうちに、何回もひどい怪我をしてしまいました。

ある時、日本代表選手団の監督に、
「君、この足の怪我はひどい。放っておくと、一生陸上ができなくなるぞ。」
と、言われたこともありました。

やがて新聞などで「織田はもうこれ以上記録は伸びない」と書かれるようになりました。郷里の広

島に帰れば、

「もう織田はだめなのでは。やめたほうがいいぞ。」

と、まわりの人からのささやきが幹雄さんの耳にも届くようになりました。それでも幹雄さんは黙々と練習を続けました。

「今日の練習も・・・やっぱり記録は伸びなかった・・・。」

沈んでいく夕日を前に一人たたずみ、頭をかかえこむ日が続いていました。

それでも次の日になると、幹雄さんは、フィールドに立っていました。

「もう一度基本に戻ってみよう。」

改めて自分の練習方法、跳び方を振り返ってみました。

「今までのフォームは、外国の選手の物まねにすぎなかった。勢いにまかせて跳ぶのではなく、足の裏で大地をたたくと同時に、上に向かって伸びあがろうとしなければならない。伸びる力があってこそ“本物”の跳躍ができる。」

と考えました。それから、上に向かって跳び上がる練習を繰り返し行いました。町で木の枝に跳びついたり、よその家の高い軒先にパッと跳び上がって触れたりしたものです。「高いもの」を見つけては跳びつき、自分の身体に跳躍力をつけることだけを考え、練習を続けました。

そして、ひと冬越して迎えた昭和2年、幹雄さんの記録がまた伸び始めました。

日本記録で優勝した幹雄さんは、再び、念願のオリンピックに出場を果たすことができたのです。

1928年7月28日、第9回オリンピック・アムステルダム大会の幕は切って落とされました。

大会6日目、(今まで誰にも負けないだけの練習をしてきたのだ。あとは全力を尽くすのみだ。)と、思いながら窓の外を見ると、輝く太陽が昇っていました。

いよいよ得意の三段跳びです。今までの練習が頭の中をよぎりました。幹雄さんは渾身の力をこめて跳びました。15メートル21センチ。その後、その記録を抜く選手はあらわれませんでした。

アムステルダム我真っ青な大空にひらめく国旗は、太陽に照らされて光り輝いていました。それは誰も予想しなかった日本で初めての金メダルでした。大歓声の中、金メダルを手にした幹雄さんは、広い競技場に一人立っていました。そのほほには一筋の涙がこぼれていました。

その後、日本の陸上競技の発展に力を尽くされた幹雄さんは、「強いものは美しい」という言葉と海田小学校の運動場のあのポールに思いをたくし、93歳でなくなられました。



【参考資料】

「織田幹雄 わが陸上人生」(日本図書センター)
「陸上競技ヨーロッパ転戦記 日本は強かった」
(有斐閣アカデミア)

エ 授業展開例 ー学習指導案（略案）ー

幹雄さんの人間的弱さとそれに打ち勝つ強さを対比させた展開A
～ 実物を授業に取り入れた指導を通して ～

(ア) 主題名 夢を実現するために 1ー(2)

(イ) ねらい 挫折を乗り越え、陸上の練習に打ち込む織田幹雄さんの思いに共感することを通して、目標や夢をもつことの大切さを知り、夢を実現するために努力し、継続して取り組もうとする態度を養う。

(ウ) 資料名 「強いものは美しいー日本人初の金メダリスト 織田幹雄ー」

(エ) 学習指導過程

	学習活動	主な発問と児童の心の動き	留意点 (☆評価の観点)
導入	1 織田幹雄さんについて主な経歴を知る。	・海田小学校出身なんだ。 ・オリンピックで金メダルをとった。 ・掲揚ポールにはそんな意味があるんだ。 ・こんな長さを跳んだんだ。	○ 幹雄さんの偉大さ、素晴らしさを実感する。 ○ 掲揚ポールの高さと同じ長さのひもを提示する。
展開	2 資料「強いものは美しい」を聞いて話し合う。 (資料は前半と後半に分けて提示する)	○ 野口さんにほめられ、幹雄さんは顔を真っ赤にしてどんなことを思っていたでしょう。 ・オリンピック選手にほめられ、うれしい。 ・跳ぶことは楽しい。 ・これからも続けたい。 ○ 思うように記録が伸びなかった時、幹雄さんは何を思っていたでしょう。 ・いくら練習してもだめかもしれない。 ・もう陸上はやめよう。 ・やめたら楽になる。 ◎ 幹雄さんが練習を続けようと思ったのはなぜだろう。 ・幹雄さんには大きな夢があるから。 ・陸上が好きだから。 ・きっと記録は伸びると自分を信じている。 ・ここでやめると後悔するから。	○ 幹雄さんが陸上と出会った時の、高揚する気持ちを考えさせる。 ○ いろいろな要因から、記録が伸びず、つらい日々を送り迷っている幹雄さんの思いを感じ取らせる。 ○ なぜ幹雄さんは続けたのか、大切にしようとしたことについてしっかり考えさせる。 ☆ 実物を取り入れた展開とすることで、苦しさを乗り越え、練習を続ける幹雄さんの思いに共感することができたか。
	3 自分の経験を振り返る。	○ がんばって続けていることはありますか。 ・運動会の練習。 ・習いごと。 ・毎日の自主勉強。	○ なぜ続けることができたのか理由を語ったり、その時の自分の心を思い起こさせる。
終末	4 「強いものは美しい」という言葉について考える。	○ 幹雄さんのいう強さとはどんなことだろう。 ・心が強いこと。 ・くじけずやりとげること。	○ 学校にある直筆の色紙を提示する。 ○ ワークシートに記入させる。

努力が達成感に結びつくことを中心場面にした展開B

～ 達成感を感じる体験を導入と終末に ～

(ア) 主題名 喜びは努力の先に 1－(2)

(イ) ねらい 挫折を乗り越え、日本人初の金メダリストになった織田幹雄さんの思いに共感することを通して、努力した先に「夢の実現」があることを知り、継続して取り組もうとする態度を養う。

(ウ) 資料名 「強いものは美しい―日本人初の金メダリスト 織田幹雄―」

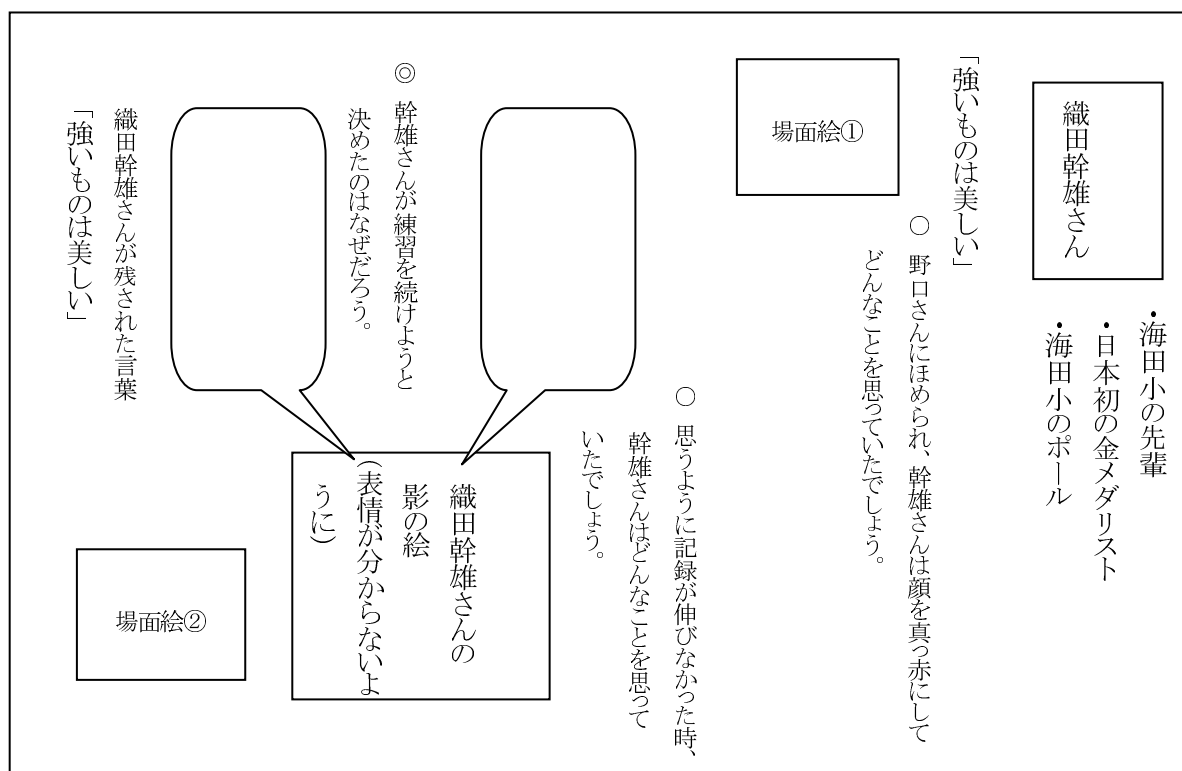
(エ) 学習指導過程

	学習活動	主な発問と児童の心の動き	留意点 (☆評価の観点)
導入	1 運動会のビデオを見て感想を出し合う。	・ みんなに拍手をもらってうれしかった。 ・ 友だちと協力できた。 ・ 6年生としていろいろな係をがんばった。	○ 自分たちの運動会での様子を見ながら、自由に感想を出し合う。
展開	2 資料「強いものは美しい」を聞いて話し合う。 (資料は前半と後半に分けて提示する) 3 自分の経験を振り返る。	○ 野口さんにほめられ、幹雄さんは顔を真っ赤にしてどんなことを思っていたでしょう。 ・ オリンピック選手にほめられ、うれしい。 ・ 跳ぶことは楽しい。 ・ これからも続けたい。 ○ 思うように記録が伸びなかった時、幹雄さんは何を思っていたでしょう。 ・ いくら練習してもだめかもしれない。 ・ もう陸上はやめよう。 ・ やめたら楽になる。 ◎ 日本初の金メダリストになり、競技場で涙を流す幹雄さんの頭にはどんな思いがめぐったでしょう。 ・ 金メダルが取れた。 ・ 胸を張って日本に帰れるぞ。 ・ 陸上を続けてよかった。 ・ 苦しいことがあったからこそ、金メダルが取れたことがうれしい。	○ 幹雄さんが陸上と出会った時の、高揚する気持ちを考えさせる。 ○ いろいろな要因から記録が伸びず、つらい日々を送り迷っている幹雄さんの思いを感じ取らせる。 ○ 金メダルを取ったという達成感を感じ取らせる。 ☆ 達成感を感じる体験を導入で活用することで、苦しいことを乗り越えメダルを手にした幹雄さんの思いに共感することができたか。 ○ なぜ続けることができたのか理由を語らせたり、その時の自分の心を思い起こさせたりする。
終末	4 もう一度運動会のビデオを見る。	○ もう一度運動会のビデオを見てみよう。	○ 最初に見たビデオと最後に見たビデオの違いを感じさせる。

(才) 資料分析表

[illegible]

(カ) 板書例



【板書の構成】

キーワードとなる言葉を短冊で用意したり、児童の発言を短い言葉で整理したりして板書する。特に、中心場面では、織田幹雄さんの心の揺れを考えさせるために、表情で判断できないように、後ろからのシルエットで表現する。また、人間的弱さが感じられる意見は下段に、前向きに頑張ろうという思いが伝わる意見は上段に分けて整理する。意見の囲みの部分も色分けして意見の違いを視覚的にはっきりさせる。最後に本資料の一番大切にしたいキーワードである「強いものは美しい」という言葉を赤ではっきり板書し、児童に「強さ」の意味を考えさせる。

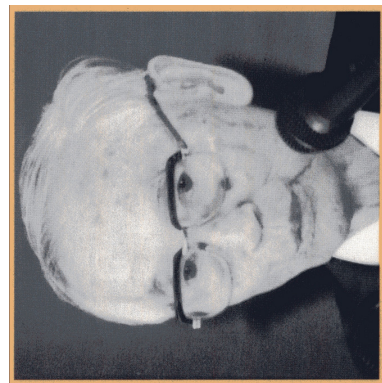
「強いものは 美しいー日本人初の金メダリスト 織田幹雄ー」

年 組 ()

◎ 織田幹雄さんは、「強いものは美しい」という言葉を残されました。

幹雄さんのいう「強い」とは、どんなことだと思いますか。

「強い」とは、



(2) 活用のポイント

本資料では、海田町出身で日本人初の金メダリストである織田幹雄さんを題材として取り上げている。児童の実態として、ほとんどの児童が身近な存在であり、自分たちの誇りでもあるととらえている。このことから、織田幹雄さんの生き様を自分に引きつけて考えていけるような展開の工夫をしていく必要があると考える。

他市町で活用する際には、児童の実態を十分把握した上で、授業を構想するよう留意することが望まれる。

ア 発問の工夫

ねらいに迫れるように、中心発問を「幹雄さんが練習を続けようと思ったのはなぜだろう。」と設定し、主人公の挫折を乗り越える力強さを感じ取らせていきたい。その中心発問をしっかり考えさせるためには、主人公が悩んだり、苦悩したりしている姿をとらえ、共感させておくことが大切である。

イ 実物の活用

資料をより身近に感じたり、驚きや感動を生んだりするために、織田幹雄さんに関連した品々（直筆の色紙、スパイク、記録ノート等）を授業の中に取り入れて指導を行っていきたい。「百聞は一見にしかず。」で、その品々を通して、幹雄さんの思いや力強い生き方などが伝わると考える。

ウ 題名の工夫

織田幹雄さんの座右の銘である「強いものは美しい」という言葉に着目し、こだわりをもって授業を行っていきたい。そこで、資料名に使ったり、終末にその「強さ」について考えたりするなど工夫した。

エ 書く活動の工夫

最後に、書く活動を取り入れ、じっくり考える場面をつくる。本時の授業を振り返りながら、「強さ」について、自分たちの生活に引きつけて主人公の生き様と重ね合わせながら考えさせていく。

(3) 授業の実例 ―児童生徒の反応を踏まえて―

ア 発問の工夫

中心発問の前段階で、「思うように記録が伸びなかった時、幹雄さんは何を思ったでしょう。」という発問をした。多くの児童から、「がんばっているのに」「もう陸上をやめたい」という意見が出され、幹雄さんの苦悩に共感できた。しかし、少数ではあるが、「もう一度がんばってみる」という前向きな意見も出された。どの意見も肯定し、受け止めながら「もう一度がんばってみる」という意見を、次の中心発問につなげた。

中心発問では「幹雄さんが練習を続けようと思ったのはなぜだろう。」と聞いた。児童からは、「陸上が好きだから」「今やめたら後悔する」などが出された。また「高い目標があったから」という意見を出した児童もあり、そこから高学年の指導内容1－(2)「より高い目標を立て、希望と勇気をもってくじけないで努力する。」へとつなげていった。

幹雄さんの弱さと強さを考えることで、両方の思いを比べることができ、「人間、挫折感や苦しさを感じることもある。でも・・・。」という思いをより強く感じる事ができた。

イ 実物の活用

導入で、幹雄さんの主な経歴を出し合った。その後、実際にオリンピックで金メダルを取った時の記録（15メートル21センチ）と同じ長さのひもを提示した。教室からはみ出るくらいの長さに児童は驚きをもって見ていた。改めて幹雄さんのすごさを感じた場面だった。

中心場面では、毎日の練習の記録や練習方法、大会での記録などが細かに書き記されているノートを提示した。こんなにも細かに、正確に記録されているノートを見ると、陸上への情熱を感じることができ、幹雄さんの思いに迫る発言を引き出すことができた。

終末において、直筆の色紙を提示した。児童は言葉に込められた思いを感じ取ることができた。

ウ 題名の工夫

幹雄さんの座右の銘「強いものは美しい」という言葉を題名に使った。最初、「強いものだけが美しく、弱いものは美しくないのか」という感想もあった。しかし、授業の終末で児童に「幹雄さんがみんなに伝えたかった『強さ』とはなんだろう。」という問いに、「努力し続けること」「苦しさには負けないこと」「前向きにチャレンジすること」などが出された。結果がよいことだけが強さという意味ではなく、そこに至るまでの生き方に強さ、さらには美しさを感じることができた。

エ 書く活動の工夫

終末に、幹雄さんが「強いものは美しい」という言葉を通して伝えたかった思いを考えた。その際、ワークシートに書く活動を取り入れた。書くことで、本時の授業を振り返りながら、自分の生活と結びつけながらじっくり考えることができた。

＜児童のワークシートの記述から＞

- ・最初、金メダルを取ったり、大会で優勝したりすることが美しいと思っていた。最後には、結果だけでなく、苦しさには負けないで努力し続けることが美しいと思った。
- ・今に満足せず、常に新しいことに挑戦することが強さだと思う。
- ・まわりの人に何か言われても、自分を信じる心が強さだと思う。
- ・自分はちょっと嫌なことがあったら投げ出すことがあったが、幹雄さんのように、負けない心をもてる人になりたい。

(4) 各教科等（体験活動を含む）との関連

児童には、事前に「心のノート」PP. 18-19「わたしの夢」の部分に書き込みを行った。自分たちの今の夢と幹雄さんの夢を比べながら授業を行うことができた。

また、授業前に行われた「運動会」では、最高学年としてどのような運動会にしたいのか、一人一人

が目標やめあてを明確にして取り組んだ。当日だけでなく、それまでの取組も大切に、それをビデオ等で記録に残して振り返りを行った。

授業後の取組としては、3月の卒業式に向けて、一人一人が個人の目標と学年、学級としての目標を設定し、それに向けて何をどのように取り組んでいったらいいかカードや短冊に書いて掲示した。その際、道徳の授業で行った「強さ」や「美しさ」というキーワードを意識させながら行った。

(5) 心のノートの活用

事前に「心のノート」PP. 18-19に自分の夢を記入し、まず、夢をもつことが大切だということを話合った。

次に、授業後、P. 16の「夢に届くまでのステップがある」という部分を教室に拡大して掲示し、幹雄さんの生き方と自分たちの生き方を比べながら日々生活が送れるように意識付けをした。

さらに、卒業に向けて、学級活動や総合的な学習の時間等で、PP. 18-19の「目標に向かう道にはいろいろなことがある」の部分を使って学習した。



教材活用例(3) 「今を一生懸命～日本女子体操を支えた池田敬子さん～」

〔小学校高学年 主題：夢を追い求めて 内容項目：1の(2)〕



(1) 開発資料の実際

ア 素材の説明

(ア) 素材の概要

〈素材—池田敬子さん—について〉

敬子さんは、三原市の出身で、1954年のローマ世界体操選手権の平均台で金メダルをとり、1964年の東京オリンピックでは、女子団体3位、日本史上初の女子体操で銅メダルを獲得した。

体操ニッポンのパイオニアであり、黄金時代をリードしてきた。



昭和 8年 (1933年)	三原市鷺浦町に生まれる。
昭和23年	三原高校に入学する。
昭和26年	日本体育大学に入学する。
昭和29年	ローマ世界選手権の平均台で金メダルをとる。
昭和36年	長男を出産する。
昭和38年	次男を出産する。
昭和39年	東京オリンピックで団体銅メダルをとる。
昭和53年	日本体育大学教授に就任する。
平成14年 (2002年)	国際体操殿堂入りをする。
平成15年	三原市名誉市民に選ばれる。
平成19年	広島市に体操専用の体育館を建設する。

池田敬子さんの経歴

(イ) 4コマ絵

池田敬子さんの著書「人生、逆立ち・宙返り」や本人へのインタビュー、史実に基づいて素材を整理し、人間的魅力が伝わるエピソードを盛り込みながらまとめた。池田敬子さんの生き方や考え方が表れているオリンピックの場面を中心場面とし、起承転結を設定した。

	起	承	転	結
場面のイメージ絵				
絵の説明	小さいころから野山をかけまわり元気いっぱいだった敬子さんは、高校時代に体操と出会う。過酷な環境の中で、大好きな体操に夢中の毎日が始まった。	厳しい合宿生活が始まる。メダルを期待されているプレッシャー。仲間どうしの言い争い。そんな中、全身あざだらけになながらも、オリンピックでメダルをとるという夢に向かって突き進んでいく。	東京オリンピックの開幕。女子体操団体戦が始まる。しかし、前半で点が伸びず、メダルが絶望的な状況に。落胆し涙を流すメンバーの中で、一人涙をこらえこぶしをにぎりしめる敬子さん。	「メダルはとれる。いいや、とる。」敬子さんは、ぐっと顔をあげ、平均台の演技へ。結果は、銅メダル。胸元で輝くずっしり重い銅メダルを見つめる敬子さん。

イ 資料の解説

【作成の要点】

高学年は、児童がそれぞれに高い理想を追い求める時期だといわれる。ある人物の生き方にあこがれたり、自分の夢や希望がふくらんだりする。同時に、自信がもてなかったり、夢と現実との違いを意識したりする時期でもある。このような時期であるからこそ、様々な生き方への関心を高めるとともに、計画的に努力目標を立て、くじけずに希望と勇気を持って取り組み、その理想に向かって着実に前進していこうとする強い意志と実行力を育てる必要がある。その際、希望をもつことの大切さや挫折感を克服する人間の強さについて考えられるようにすることが大切である。

また、高学年の「心のノート」の関連ページ（PP. 18-19）には、キーワードとして「目標に向かう道にはいろいろなことがある」とあり、具体的には「あきらめの坂」「ふんばりの滝」「もう一步の岩」などの人間的な弱さや、挫折感を克服しようとする強さが分かりやすく絵とともに示されている。

そこで、資料作成にあたっては、厳しい合宿生活の中での葛藤場面と、夢であったオリンピックの舞台で絶望的な状況になったときの葛藤場面を設定し、敬子さんの弱さや強さの両面を考える中で、目標に向かいくじけないでやりぬこうとする心情をねらいとして設定した。

現代の児童は、夢をもっているが、現実とのギャップに負け、すぐにあきらめてしまおうとする傾向にある。「資料に登場する人物は、もともと資質があったからできたのだ。」とか、「自分には到底できないこと。」といったように、特別な人だからできたことだと思いがち。しかし、目標を達成した人の陰にはつねに努力があること、何度も挫折しながらもあきらめなかったことなどに気付かせ、着実に前進していこうとする心情を養いたいと考える。

体操競技自体は、児童に馴染みがないと予想される。そこで、大会での平均台の演技の様子を映像で見せるとともに、平均台の実際の高さや幅を視覚的に見せる工夫をすることでイメージをもたせるようにした。体育で、事前に学校用の平均台を歩いたりターンさせたりしておくとともに効果的である。



【心に響くちょっといいはなし】

映画監督の新藤兼人さんとともに、平成14年、三原市名誉市民に選ばれている。広島市に、私財を投げうって西日本初の体操専門の体育館を設立しているが、そこは体操競技者だけでなく、健康保持のための体操の普及にも役立っている。池田敬子さんは競技者であり、指導者、教育者であったが、次の言葉に池田さんの教育者としての信念が窺える。

—「スポーツが勉強を支え、勉強がスポーツを支える」と信じる—

スポーツに打ち込むと何度も壁に出くわすでしょ。そこをどう乗り切るか。頭を使って、あの手この手を考える。賢くなる。特に体操は自由度の高いスポーツ。技を考え始めるときりがない。どんどん考えて、習得して、また考える。身体能力だけでなく、考える力も伸ばすスポーツの一面にも注目してほしい。

三原には、体操が盛んになる土壌がある。やっさ踊りだ。全身を激しく動かして、みんなを陽気にさせる自慢の踊りを夏の祭りだけ登場させるのはもったいない。「やっさクラブ」をつくりたいと考えている。年中「やっさやっさ」と体を動かす。体操の基本を学びながら、地域活性化の担い手も創出できると思う。

ウ 資料全文

「今を一生懸命」

～日本女子体操を支えた池田敬子さん～

平成 21（2009）年 10 月 16 日，

「やりました！鶴見選手。世界体操選手権の女子個人総合において 43 年ぶりの銅メダルをかくとくしました！」

このニュースを誰よりも喜び，満面の笑みを浮かべながら見ていた人がいる。池田敬子さん。彼女こそが，43 年前のオリンピック銅メダリストであり，今なお日本の体操競技の発展のために力をつくしている人なのである。

敬子さんは広島県三原市佐木島^{さきしま}生まれ。小さいころから野山をかけまわる元気いっぱい女の子だった。体そう競技との出会いは高校時代。とくいな鉄ぼうで思うぞんぶん，くるくるくと回っている姿をたまたま体そう部の先生が見つけた。すぐに体育館に連れて行かれ，目にしたのは，マットや平均台の上で全身を使ってとんだりはねたりしている体そう部員たちの姿。（なんだ，これは？・・・）しばらく，ぼかんと口を開けて見つめていたが，引きよせられるように平きん台に歩み寄り，初めてふれたそのときから，体そうに夢中の毎日が始まったのだ。中でもとくいだったのは平きん台。はば 10 cm，長さ 5 m，高さ 1 m20 cm。バランスをくずしてほんの数ミリ身体がかたむいただけでも，落下してしまう。たえず落下のきょうふがつきまとう種目だ。しかし，敬子さんは，バレエシューズをはいたり，げたで歩いてみたり，ついにはげたをはいたまま平きん台の上でなわとびをしたりと様々な練習を考え出した。ひとつ技ができるようになると，また新しい技にちょう戦していく。明日の練習が待ち切れなかった。体そうづけの毎日を過ごし，体そうのできる大学へ進んだ。



しかし，大学時代の練習はほとんど屋外。真冬の朝は，地面に 10 センチもあるしも柱が立っていても，す手にはだしで土の上での練習だった。手や足はしもやけだらけで血がにじむ。でも，練習を休んだ日はない。雪がつもれば「ラッキー！」と鉄ぼうの下にかき集めてマットのかわりにした。敬子さんにとってそんなかんきょうはへっちゃらだったのだ。

大学 2 年生の時のヘルシンキオリンピックでは，女子の体そうチームが参加できない中，男子体そうチームが多くメダルをかくとくした。日本でテレビちゅうけいを食い入るように見つめていた敬子さんは（いつかきっと私たちも・・・）と何度も何度もつぶやいていた。



そして大学4年生になると、初出場の世界体そう選手権の平きん台で金メダルにかがやくなど、すばらしい成せきをおさめていった。敬子さんをリーダーとして、日本の女子体そうはかくじつに世界のぶたいに立ち始めていったのだ。しかしまだ、オリンピックのぶたいでのメダルはいま数年が過ぎていた。結こんし子どもを育てながら選手としてかつやくする中、東京オリンピックまで、あと2年とせまり、初のメダルをめざしてきびしい合宿生活が始

まった。二人のおさない子どもは近くの旅館にあずけ、朝は5時すぎに起きると合宿所から坂をかけおりて旅館に行き、おむつをせんたくする。当時はせんたくきなどなく、たらいでの手洗いだ。皮がむけている手のひらに、冷たい水がしみる。せんたくが終わるとすぐにまた合宿所にもどる。まだねているメンバーをおこして、6時から朝練習のはじまり。げんかいぎりぎりまであせを流す練習が、来る日も来る日も続く。全身あざだらけになっても、メンバーの思いはみな同じ。しかし、メダルという大きなプレッシャーの中、言い合いのけんかになることもめずらしくはなかった。

そんな冬のある夜。体はつかれはてていながら、なかなかねむれずにいた。(本当にメダルがとれるのかな・・・・・・) 敬子さんは、冷たい冬の夜空にかがやく星を、一人ながめた。そんな時はいつも(結果を考えないこと。今を一生けん命やるだけ。)と、自分自身に言い聞かせるのだった。そんな合宿生活が、2年続いた。

昭和39(1964)年10月10日。さわやかな秋晴れのもと東京オリンピックが開幕した。いよいよ女子体そう団体戦。きょうごうチームが競う中、メダルをとるためには前半戦のきてい演技で3位以内に入り、そのままにげきる作戦だった。ところが・・・・。他国のチームが高得点を出す中、日本は小さなミスが重なって点がのびない。メンバー全員、そしてかん客も、かたずをのみ、とく点板を見る。

「ああっ・・・・。」日本のおうえんでうめつくされた会場は、落たんのため息とともに、しんと静まりかえった。メダルが絶望的な状況になってしまったのだ。

「もう、だめだ。後半どんなにがんばっても追いつけるかどうか・・・・。」

「あんなに期待されていたのに・・・・。」

メンバー全員の中から、涙が流れた。一人涙をこらえ、こぶしをにぎりしめたままだまってうつむく敬子さん・・・・。



しかし、大きく息をすい込むと、ぐっと顔をあげた。

「まだ、終わっていない。メダルはとれる。いいや。とる！」

いよいよ後半の勝負の演技「平きん台」。仲間の技が決まるたびに「エイヤッ！」と気合いのかけ声をかける。そして、最終演技者、敬子さん。ゆっくりと平きん台の前に立つ。ここまでの自分を支えてきたものが、腹にどっしりおさまっている。「大丈夫。それだけのことをしてきたじゃないか。今を一生けん命やるだけ。」不思議なほどに心が落ち着いていくのが分かった。まるでこきょうのおだやかな瀬戸内海の海面のように・・・・。もう一度ゆっくり息をすい込む。「よしっ！」大きく一步をふみ出すと、ダイナミックなジャンプとターン。ぴたりと決まった。「エイヤッ！」仲間の声がひびく。笑

顔になったのが自分でもわかった。そしてフィニッシュは、この日のために温めてきた大技「片足前方宙返り」。マットにすいこまれるように着地が決まったしゅん間、「うおー！」会場から大かん声があがった。



結果は女子体そう団体3位、オリンピック初のメダルかくとく。5人のチームメートとともに、表しょう台の上に立つ敬子さん。胸元にはずしりと重い銅メダルが美しいかがやきをはなっていた。

大かんしゅうのかん声とはく手がひびく中、敬さんはあふれてくる思いを胸にじっとメダルを見つめた。

引退後も体そう競技はってんのために全力で力をつくし続けている敬子さん。今もこうはいの育成に一生けん命の毎日だ。

【参考文献】

池田敬子 「人生、逆立ち・宙返り」（2009） 小学館

エ 授業展開例 ー学習指導案（略案）ー

壁にぶつかった時の人間的な弱さと強さについて考える展開
～ 視聴覚機器の活用により興味をもたせる工夫を取り入れた指導 ～

（ア）主題名 夢を追い求めて 1－（2）

（イ）ねらい オリンピックでのメダルをつかむ寸前に絶望的な状況になった時の敬子さんの心情を考えることを通して、夢に向かい強い意志をもってくじけないでやりぬこうとする心情を育てる。

（ウ）資料名 「今を一生けん命」

（エ）学習指導過程

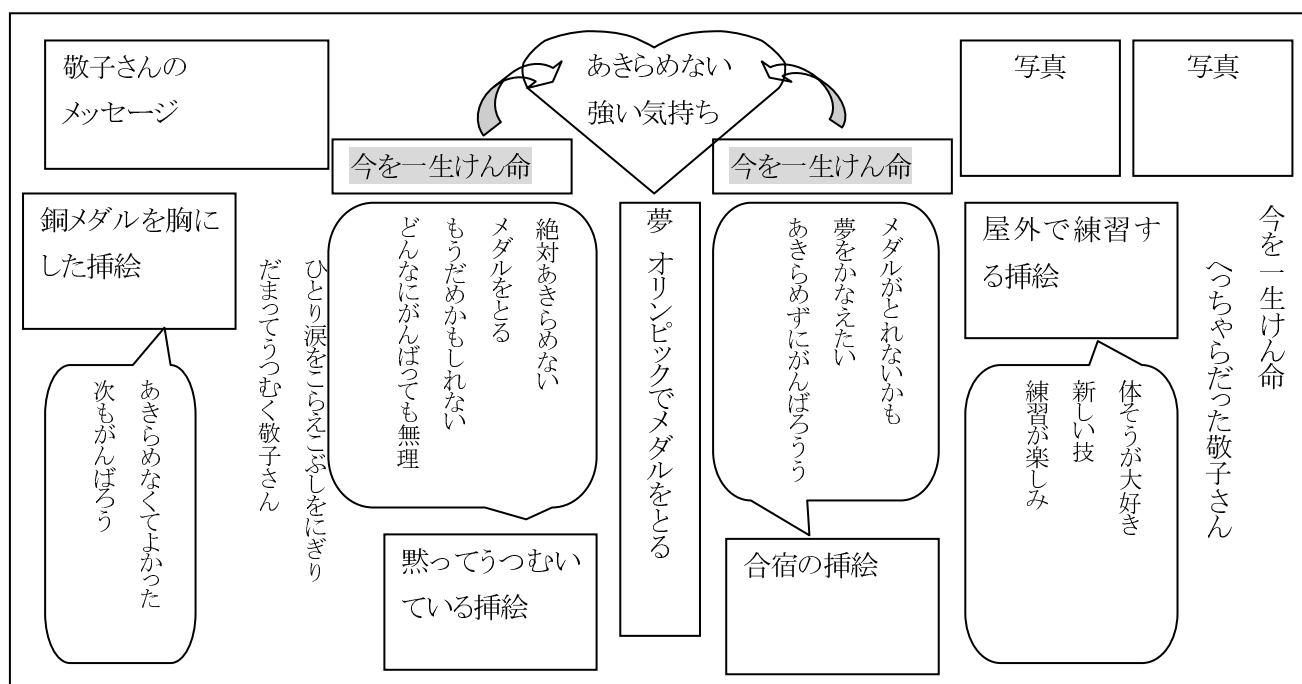
	学習活動	主な発問と児童の心の動き	留意点 (☆評価の観点)
導入	1 体操競技（平均台）のビデオを見る。	○ ビデオを見て、どんなことを思っただろう。 ・高い平均台の上でまわるのがすごい。 ・なんであんなことができるのかな。	○ ビデオを見て気が付いたことを自由に出させる。 ○ 平均台の補足説明をして高さの実感をもたせる。(高さ1m20cm)

展 開	2 資料「今を一生懸命」を聞いて話し合う。 3 敬子さんの生き方と自分を重ねて考える。	○ どうして敬子さんは、こんな環境もへっちゃらだったのだろう。 ・体操が好きで好きでしかたなかった。 ・新しい技が出来るようになっていくのが楽しかったから。 ・いつも夢中になって取り組んでいたから。 ○ 厳しい合宿生活の中で敬子さんはどんなことを考えているだろう。 ・厳しい練習に耐えられるだろうか。 ・どんな苦勞をしてでも夢をかなえたい。 ・必ずオリンピックでメダルをとる。そのためには一生懸命がんばる。 ・結果を気にするより、今を一生懸命やるだけ。 ◎ 一人涙をこらえ、こぶしをにぎりしめたまま黙ってうつむく敬子さんは、心の中でどんなことを考えているだろう。 ・ここまでがんばってきたのにだめかもしれない。 ・あきらめたら、これで終わってしまう。 ・まだ希望はある。絶対にあきらめてはいけない。 ・結果を考えてどうするんだ。今、目の前の競技を一生懸命にやるだけだ。 ○ 表彰台にのぼってじっとメダルを見つめている敬子さん。どんな思いがあふれてきているのだろう。 ・あきらめずにやりとげてよかった。 ・もしメダルがとれなかったとしても、あきらめずにがんばれた自分を褒めてあげたい。 ・また次の目標に向かっていきたい。 ○ 敬子さんの生き方から学んだ事で、自分に活かしたい事は、どんな事だろう。 ・苦難にあってもあきらめないこと。 ・努力を続けること。 ・どんな時も、前向きに前進すること。 ・うまくいかないときも、乗り越える強い心をもつこと。	○ 三原市出身の体操選手の資料であることに触れる。 ○ 大好きな体操に夢中になって取り組んでいるからこそ悪条件を克服できていることをつかませる。 ○ 厳しい練習の中で折れそうになる心と夢に向かってやりとげようとする心の葛藤に迫らせる。 ○ 「どうしてここまでがんばるの。」と補助発問を行い、夢に向かって強い意志をもってやり遂げようとしていることに気付かせる。 ○ ワークシートに書かせ交流させる。 ○ 「敬子さんにあきらめない気持ちを湧き上がらせているものは何だろう。」と補助発問を行い、これまでの努力が敬子さんを支えていることに気付かせる。 ☆ 書く活動を通して、困難に出会ってもあきらめずにやりぬこうとする敬子さんの心情を自分なりにとらえ、自ら考えを深めることができたか。 ○ 達成感、充実感と同時に新たな目標に向かおうとする敬子さんの心情に共感させる。 ○ 場合によっては「もしメダルがとれていなかったら、どう思っただろう。」と補助発問を行い、強い気持ちであきらめない過程が大切であることに気付かせる。 ○ 郷土の人物の生き方から学んだことを考えることで、自分のこととしてとらえられるようにする。
終末	4 メッセージを聞く。	○ 池田敬子さんのメッセージを聞こう。	○ ねらいとする道徳的価値を温め、余韻をもって終わる。

(オ) 資料分析表

資料場面	登場人物の行為 心情	主人公の心情 (敬子さん)	児童の意識の流れ
○体操に出会う。夢中になる。 ○厳しい合宿を送る。 ○オリンピックに出場するが、メダルが絶望になる。 ○銅メダルを獲得する。	中心人物 (敬子さん) ・敬子さんと体操の出会い高校時代。初めてふれたそのときから、体操に夢中の毎日が始まった。中でも得意だったのは平均台。 ・敬子さんは、様々な練習を考え出した。一つ技ができるようになる。また新しい技に挑戦していく。明日の練習が待ち切れなかった。 ・真冬でも素手と素足で土の上での練習だった。手も足もしもやけどになつて、そんな環境はへつちからだ。 ・日本でテレビ中継を見ながら(いつもこっそり私たちもすり)とウケで・・・)と何度も何度もつちやいだ。 ・初出場の世界体操選手権の平均台で金メダルに輝くなど、すばらしい成績をおさめた。 ・二人の幼い子どもを旅館におまけして合宿した。朝は五時すぎに起床し、おむつをせたくする。 ・六時から朝練習のはじまり。みんなで暖房をりきりまで仕を流す練習が、来る日も来る日も続く。全身あせだらけ。 ・体は疲れ果てていながら、なかなか寝けない夜もあった。(本当にメダルがとれるのかなあ・・・) (練習を休まないで、今を一生懸命やるだけ)と、自分自身に言い聞かせた。 ・ひとりで涙をこらえ、こぼしをこぼりしめたまま、黙つてうつむく敬子さん・・・ ・大きく息を吸い込んで、うつと息を吐いた。「メダルはとれる。いいや。とる。」 ・ゆつくりと平均台の前だ。大きく一歩を踏み出す。ダイナミックなジャンプとターン。そしてフィニッシュは、この日のために磨いてきた大技「片足前方宙返り」。アツトにすいまれるように着地がきまこた。 ・結果は女子体操団体三位、オリンピック初のメダル獲得。五人のチームメイトとともに、表彰台の上に立つ。 ・大観衆の歓声と拍手が響く中、敬子さんはあふれてくる思いを胸に、ことメダルを見つめた。 ・引退後も熱心に体操競技発展のために熱心な力をつくし続けている。 ・今も後輩の育成に一生懸命の毎日だ。 その他の人物 (スベレ) ・メダルという大きなリッシャーの中、言い合いのけんかになつて、いもすらしはなれた。 ・いれななくが量なつて空のひびき。 ・「あら、だめだ。後半さんになんか、はいても通ひひかない・・・」 ・「あなたに期待されていたのに・・・」 ・メンバー全員の前から、絶望の涙が流れた。	体操に夢中の毎日 ・いろいろな方法で練習してみよう。 ・新しい技ができるようになる。 ・と楽しいな。 ・早く練習したいな。 ・体操が大好き。 厳しい合宿生活 ・子どもの世話をしながらの練習は大変だ。 ・本当にメダルがとれるのかなあ。 ・けんかをしている場合じゃない。 ・メダルをとるためにがんばろう。 ・今を一生懸命にやろう。 黙つてうつむく ・もうメダルはためかもしれない。 ・こんなに頑張つてきなのに。 ・ここであきらめるわけにはいかない。 ・絶対にメダルをとる。 ・自分を信じてやろう。 ・こんなに努力してきたんだ。やり抜こう。 メダルを見つめる ・やつた。念願のメダルがとれた。 ・努力が報われた。 ・みんなで頑張つてきてよかった。 ・あきらめなくてよかった。 ・次ががんばろう。	児童の意識の流れ ○平均台は恐くないのかな。 ○どうしてあんな練習方法を使うのかな。 ○よほど練習が好きなんだな。 ○素手や素足の練習は痛いだろな。 ○冬に外で練習するのは、寒くていやにならなかつたのかな。 ○寒さを押さもつちをやらなくらい、体操が好きなんだな。 ○赤ちゃんの世話もしていたなんですよ。 ○お母さんになつてもやれるんだな。 ○家族の応援があつたのかな。 ○二週間もよく合宿できたな。 ○毎日、毎日練習はつかりだといやにならなかつたのかな。 ○やつぱり悩みもあつたんだ。 ○メダルをとるという夢を絶対にかなえたいと思っているんだな。 ○夢があるから頑張れたんだな。 ○もう、あきらめるのかな。 ○今まで頑張ってきたのに、かわいそう。 ○敬子さんは、どうするのかな。 ○まだ結果はわからない。 ○今まで努力してきたから、やつぱりあきらめるわけにはいかないよ。 ○最後まで全力で頑張つたんだね。 ○絶望的な状況でもあきらめない強い気持ちがあつたんだね。 ○銅メダルがとれてよかったね。 ○やつぱりあきらめなくてよかった。 ○あきらめない気持ちが夢をかなえたんだな。 ○おはあちゃんになつても、まだ一生懸命やつてるなんですよ。 ○次の夢は何なのかな。

(カ) 板書例



【板書の構成】

【板書の構成】

敬子さんが平均台の演技をしている実際の写真や、場面絵を使い、視覚的にもわかりやすく構成していく。

具体的には、『いつかメダルを』という敬子さんの夢を黒板の真ん中に大きく据える。その両側に、2回の葛藤場面での心情を書いていく。その中で、「夢に向かってがんばりたい」「あきらめない」等の意見を矢印で『いつかメダルを』に向け、書き込んでいく。

また、『今を一生懸命』というキーワードを短冊で提示し、夢に向かう過程の敬子さんの生き方を印象付けられるようにする。

さらに、最後の発問で「次の目標に向かってまたがんばりたい」という意見が出た時には、『次の夢』と書き、敬子さんの生き方にも触れられるように工夫したい。

題名である『今を一生けん命』は、最後に提示するほうが望ましい。

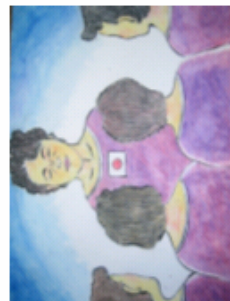
(キ) ワークシート

標準 $\square \rightarrow \Delta \rightarrow \perp$

年	組	番	名前
1997	1	1	山田 太郎
1997	1	2	山田 次郎
1997	1	3	山田 三郎
1997	1	4	山田 四郎
1997	1	5	山田 五郎
1997	1	6	山田 六郎
1997	1	7	山田 七郎
1997	1	8	山田 八郎
1997	1	9	山田 九郎
1997	1	10	山田 十郎
1997	1	11	山田 十一郎
1997	1	12	山田 十二郎
1997	1	13	山田 十三郎
1997	1	14	山田 十四郎
1997	1	15	山田 十五郎
1997	1	16	山田 十六郎
1997	1	17	山田 十七郎
1997	1	18	山田 十八郎
1997	1	19	山田 十九郎
1997	1	20	山田 二十郎
1997	1	21	山田 二十一郎
1997	1	22	山田 二十二郎
1997	1	23	山田 二十三郎
1997	1	24	山田 二十四郎
1997	1	25	山田 二十五郎
1997	1	26	山田 二十六郎
1997	1	27	山田 二十七郎
1997	1	28	山田 二十八郎
1997	1	29	山田 二十九郎
1997	1	30	山田 三十郎
1997	1	31	山田 三十一郎
1997	1	32	山田 三十二郎
1997	1	33	山田 三十三郎
1997	1	34	山田 三十四郎
1997	1	35	山田 三十五郎
1997	1	36	山田 三十六郎
1997	1	37	山田 三十七郎
1997	1	38	山田 三十八郎
1997	1	39	山田 三十九郎
1997	1	40	山田 四十郎
1997	1	41	山田 四十一郎
1997	1	42	山田 四十二郎
1997	1	43	山田 四十三郎
1997	1	44	山田 四十四郎
1997	1	45	山田 四十五郎
1997	1	46	山田 四十六郎
1997	1	47	山田 四十七郎
1997	1	48	山田 四十八郎
1997	1	49	山田 四十九郎
1997	1	50	山田 五十郎
1997	1	51	山田 五十一郎
1997	1	52	山田 五十二郎
1997	1	53	山田 五十三郎
1997	1	54	山田 五十四郎
1997	1	55	山田 五十五郎
1997	1	56	山田 五十六郎
1997	1	57	山田 五十七郎
1997	1	58	山田 五十八郎
1997	1	59	山田 五十九郎
1997	1	60	山田 六十郎
1997	1	61	山田 六十一郎
1997	1	62	山田 六十二郎
1997	1	63	山田 六十三郎
1997	1	64	山田 六十四郎
1997	1	65	山田 六十五郎
1997	1	66	山田 六十六郎
1997	1	67	山田 六十七郎
1997	1	68	山田 六十八郎
1997	1	69	山田 六十九郎
1997	1	70	山田 七十郎
1997	1	71	山田 七十一郎
1997	1	72	山田 七十二郎
1997	1	73	山田 七十三郎
1997	1	74	山田 七十四郎
1997	1	75	山田 七十五郎
1997	1	76	山田 七十六郎
1997	1	77	山田 七十七郎
1997	1	78	山田 七十八郎
1997	1	79	山田 七十九郎
1997	1	80	山田 八十郎
1997	1	81	山田 八十一郎
1997	1	82	山田 八十二郎
1997	1	83	山田 八十三郎
1997	1	84	山田 八十四郎
1997	1	85	山田 八十五郎
1997	1	86	山田 八十六郎
1997	1	87	山田 八十七郎
1997	1	88	山田 八十八郎
1997	1	89	山田 八十九郎
1997	1	90	山田 九十郎
1997	1	91	山田 九十一郎
1997	1	92	山田 九十二郎
1997	1	93	山田 九十三郎

[illegible]

敬于和之世、当此其时也、予亦知所托、予亦知所托、予亦知所托。



☆ 藤井和之先生の「小説の楽しみ」を、田中先生が訳された。読んでみる。

(2) 活用のポイント

本資料は、夢を追い求める中で何度も葛藤をしながら、あきらめずに前向きに努力する池田敬子さんの人間的な弱さと強さが表れる内容とした。それは、高学年の心のノート「目標に向かう道にはいろいろなことがある」とも重なる。そこを踏まえた上で、展開を工夫したいと考えた。

ア 発問の工夫

ねらいとする道徳的価値に迫らせるためには、2回の葛藤場面をしっかりと考えさせることが大切である。そこで、二つ目の基本発問と中心発問の2回を葛藤場面として設定した。誰も目標を達成するまでの過程で、何度も挫折を経験する。その度に葛藤しながらあきらめずに努力し続けることによって夢がかなうことにつながるのである。

具体的には、厳しい合宿生活の場面では、オリンピックでメダルをとるという夢に向かう強い意志と、プレッシャーに襲われ弱音を吐く人間的な弱さと葛藤を考えさせたい。そこで、「どうしてここまでがんばるの?」と補助発問を行い、厳しい中で努力し続けることができるのは、自分の夢をかなえたいという強い気持ちがあることに気付かせる。あきらめないという心情だけが出た場合には、「どうして、眠れない夜があったの?」と切り返し、夢に向かいひたすら努力を続ける敬子さんの中にも、不安や弱音があることを感じさせ、児童に共感させる工夫も必要である。

また、オリンピックで絶望的な状況になった場面では、「一人涙をこらえ、こぶしをにぎりしめたまま黙ってうつむく敬子さんは、心の中でどんなことを考えているだろう。」と問い、ワークシートに多様な考えを書かせた後、意見交流をして深めていきたい。「あきらめたくない。」という意見が出た時には、「敬子さんにあきらめない気持ちを湧き上がらせているものは、何だろう。」と補助発問を行い、ここまでやってきたことや努力、合宿生活の中での挫折感を克服してきた強さが、敬子さん自身を支えていることに気付かせる。

「あきらめずにがんばろう。」という意見に偏った場合には、「がんばっても、メダルがとれないかもしれないよ。」と切り返し、最後まであきらめずに自分を信じ努力する気持ちが大切である

ということや、メダルよりも、それに向かっていこうとがんばった過程に意味があることをつかませたい。

イ 書く活動の工夫

中心場面では、ワークシートを使い、自分の考えをじっくりと考えさせたい。絶望的な状況になりながらも、「今を一生懸命やるだけ。」と、最後まであきらめない心情と、そういう思いをわきあがらせるものは何かということとともに、敬子さん自身の生き方を、中心場面までをふり返らせながら考えさせたい。この時しっかりと考えさせておくことで、指導展開例の学習活動の展開後段「3 敬子さんの生き方と自分を重ねて考える」場面で、再度ワークシートに書く時、敬子さんの生き方から自分自身が学び、これからの自分に活かしたいことを考えることができるものと思われる。自分の生活を振り返る場面では、ねらいとする道徳的価値とずれが生じることがある。そこで、中心場面で主人公に共感しじっくり考えたこととリンクさせ考えることができるワークシートとした。

ウ 視覚的につかませる工夫

児童には、体操競技についての知識が少ないと予想される。そこで導入では、大会で体操競技の中の平均台の演技をしている様子を映像で提示する。また、実際の長さや高さ、幅で作ったテープを提示し、特に120cmという高さを示して、資料の中で「つねに落下の恐怖がつきまとう種目だ」というイメージや、幅10cmの上での演技の難しさをつかませ、興味をもたせて資料に引き込みたい。

また、池田敬子さんが、水泳の金メダリスト「北島康介」選手と一緒に写っている写真を提示し、「この人を知っていますか?」と問うことで、児童から「北島康介選手」と引き出した上で、「この隣にいる人が、今日のお話の主人公、三原市出身の池田敬子さんです。」と、紹介する。児童は、よく知っている北島康介選手が慕う人物ということで、身近に感じ、関心をもつと思われる。

エ キーワードを生かす工夫

題名にもあるように「今を一生懸命」がキーワードとなっている。夢を叶えるまでの過程で挫折しそうになりながらも、あきらめずに努力する姿

を「今を一生懸命」という言葉で象徴し、資料の文章の中にも敬子さんの言葉として登場させている。2度の葛藤場面ごとに児童の意見を整理したあと、「今を一生懸命」という短冊を貼りまとめることで、その時々一生懸命がんばってきたこと、そしてそれが夢につながったこと、70歳を過ぎてでもまだ夢に向かって進んでいる敬子さんの生き方を感じ取らせたい。

(3) 授業の実際—児童生徒の反応を踏まえて—

ア 発問の工夫

2回の葛藤場面では、「こんなにがんばっても、もしメダルがとれなかったらどうしよう。」「がんばれば夢はかなう。でもあきらめたらかなわない。だからあきらめずにがんばろう。」などの意見が出てきて、夢に向かう強さの裏には弱さがあることを感じ、敬子さんの人間的な両面を考えることができた。

そして、「生活のふり返し」では、「敬子さんががんばれたように、私もがんばれるかもしれない。自分の夢に向かって、ずっと努力を続けていきたい。」「やっぱり、あきらめないということは大切だと思った。だって、あきらめたら、そこからは何も続かないけど、あきらめなかったら、どんなことが起こるかわからない。敬子さんもあきらめなかったから、メダルがとれた。ぼくも、そういう考え方をしていきたい。」など、敬子さんの生き方と自分自身をつなげて考えることができた。

イ 書く活動の工夫

中心場面でのワークシートでは、「ここまでがんばってきたのに、もうだめかもしれない。でも、やっぱりあきらめたくない。だめでも最後までしっかりやりとげたい。」「まだ終わったわけじゃない。ここであきらめなかったら、メダルがとれるかもしれない。」「絶対あきらめないぞ。今までがんばってきたのだから、自分を信じてがんばる。」など、しっかりと考えて書くことができた。また、展開後段の「3 敬子さんの生き方と自分を重ねて考える」場面では(ア 発問の工夫 の反応例参照) 敬子さんの生き方から学んだことを考えて書くことができた。

ウ 視覚的につかませる工夫

導入の平均台の演技の映像では、「すごい！」

「なんであんなことができるん？」と、とても興味をもった。児童に馴染みのない体操競技の内容であるので、映像を見て把握できたことはとても効果的であった。

また、当時の写真や北島康介選手との写真も効果的であった。知らない池田敬子さんの写真だけよりも興味をもつことができたようである。

学級には、体操教室に通っており、大会で実際に池田敬子先生に出会ったことがあるという児童がいたことや、海水浴やスポーツ少年団等の合宿で佐木島に行ったことがある児童も数人おり、「知ってる。」とさらに興味をもち資料に入ることができた。

エ キーワードを生かす工夫

意見を交流したあと、板書に提示することでキーワードに込められた敬子さんの生き方を印象付けることができた。児童からは「敬子さんの口癖みたい。そんなふうに自分を励ましてがんばっていたと思う。」などの反応も見られた。

(4) 各教科等(体験活動を含む)との関連

体育で、学校用の平均台で体験しておくともよい。ただし、低いので歩いたり少し走ったりするくらいことは、そう難しくない。教科の目標や安全面を踏まえた上で、いくつかの技を体験することができたら、より、難しさが実感できると考える。

また、日記や作文等で、自分の夢に向かってがんばっているものなどを集めておくと、「生活のふり返し」で、簡単に紹介できる。

(5) 心のノートを活用

道徳の時間の終末において、「心のノート」PP. 18-19の「わたしの夢」を活用し、自分の夢を記入したり、「あきらめの谷」「ふんばりの滝」などの言葉と合わせて自分自身の過程をふり返らせたりすることができる。

学級活動において、「心のノート」PP. 16-17を活用し、イチロー選手が夢を叶える過程を知り、自分の夢を考えていくこともできる。

国語科「マザー・テレサ」の学習のまとめとして行う生き方を学びたい人の伝記を読み、本のカバーを作る学習において、「心のノート」PP. 18-19「わたしが学びたい人物」の欄を活用する。

教材活用例(4) 「心のたすきをつなぐ」

〔小学校高学年 主題：集団の役割と責任の自覚 内容項目：4の(3)〕



(1) 開発資料の実際

ア 素材の説明

(ア) 素材の概要

〈素材—広島県立世羅高等学校陸上部—について〉

男子は、全国高校駅伝競走大会第1回、2回と連続優勝を果たし、創世記の全国大会に「世羅」の名を知らしめ、確固たる伝統をつくりあげた。過去40回出場し、6度の全国制覇をはじめ、29度の入賞を果たしている。

女子も、全国高校駅伝競走大会に5年連続で出場を果たしている。

「速い選手より、強い選手に」を部訓とし、「自主・自立」をテーマに部活と学業の両立をめざし、努力している。



男子全国高等学校駅伝競走大会
優勝記念碑ロード
【広島県立世羅高等学校】

(イ) 4コマ絵

全国大会のメンバーから外れ落ち込む大介が、仲間たちとの関わりを通して集団の一員であることを意識し、自分自身を見つめ、考える場面を中心場面として起承転結を設定した。

	起	承	転	結
場面のイメージ絵				
絵の説明	大介は、世羅高校陸上部に入り、全国高校駅伝競走大会で選手として走ることが目標に練習に励み、広島県予選では、2区を走り、区間一位の走りで優勝に貢献した。 しかし、大介は、全国大会出場の10人のメンバーの中には入ることができたが、選手からは外れてしまい、補欠として選手のサポートに回るようになった。	練習する気がおこらず、グラウンドにたたずむ大介は、仲間たちが練習する姿を見ながら、これまで自分自身も仲間達に支えてもらって走ってきたことに気付く。	仲間の一人からの声かけから、チームの優勝に向けて自分にできることは何か考え、ベストを尽くそうと決心する。	大会当日、大介は選手のサポートに回り、仲間たちを支えた。 世羅高校が、優勝したとき、大介はそれを心から喜ぶ。 優勝パレードでは、すがすがしい気持ちで優勝旗を掲げる大介の姿があった。

イ 資料の解説

【作成の要点】

世羅町は、「駅伝の町」とよばれるほど駅伝がさかんな町である。中国実業団駅伝をはじめとし、「世羅駅伝」「甲山駅伝」「世羅西駅伝」など、児童生徒も参加できる駅伝大会やマラソン大会が数多く開かれる。また、世羅高校陸上部は、全国高校駅伝で優勝経験のある強豪校で、町のあちらこちらで陸上部員たちが練習している姿を見かけることができる。駅伝は、世羅に住む児童にとって身近に感じることでできる素材である。そこで、駅伝を通して集団の中の役割や責任の自覚を考えさせたいと考え、資料の素材として選んだ。

高学年になると、学校での委員会活動やクラブ活動、地域のスポーツ少年団などの集団活動を通して、責任ある役割を受けもつ経験が多くなる。それにおける集団と個の関係は、集団の中で一人一人が個として尊重され、生かされながら、主体的な参加と協力の下に集団全体が成り立ち、その向上が図られるものでなければならない。そのためには、集団に所属する一人一人が、その集団の意義に気付き、その中での自分の位置や役割を自覚して責任を果たすとともに、主体的に協力して全体の向上に役立とうとする態度をもつことが重要である。

そこで、資料作成にあたっては、全国大会出場メンバーから外れて落ちこむ大介が陸上部の仲間たちとの関わり合いを通して、チームの一員としての自分の在り方を考える中で、集団の一員としての自分の役割を自覚し、集団の向上のために頑張ろうとする心情を育てることをねらいとして設定した。

この時期の児童は、自分の役割や責任に対する自覚が深まり、責任をもって行動したり、友達と協力したりできるようになる。しかし、やるべきことが分かっている、目の前の楽しさに気を取られ、協力して取り組めないときもある。そこで、与えられた役割に対して、主体的に責任を果たしたり、みんなで協力したりすることで、そこに自分がいる意味や周りの人が喜んでくれるうれしさを実感できることに気付くようにしていきたいと考える。

駅伝では、個人の力も大事ではあるが、チームの力が大事になってくる。選手だけでなく、それを支える仲間たちの存在があってこそ、練習以上の力が出せるのである。チームが勝つためには部員全員がそれぞれの役割を果たすことが大切になってくるということを考えさせるために駅伝を素材として選んだ。



【心に響くちょっといいはなし】

世羅高校のある地区の運動会のプログラムに「健康マラソン」がある。地域の子どもから、お年寄りまで参加するマラソンなのであるが、そのマラソンに毎年、世羅高校陸上部の部員たちが参加している。

スタートの合図とともに、走ることに自信のある小中学生は、陸上部のお兄さんたちに負けまい、離れまいと全力で走っている。お年寄りたちは、マイペースで完走を目指して走っている。

陸上部員たちは、小中学生に合わせて走る者あり、お年寄りに合わせて走る者あり、みんなが「世羅高校の陸上部の人たちと走ったよ。」と思えるような工夫をしてくれている。

「若いもんが一緒に走ってくれると最後まで走ろうという気になるよ。」

と、地域のお年寄りは言われる。

陸上部員たちは、地区民運動会で走ることで、地域への感謝の気持ちを表している。



健康マラソンで地域の人たちと走る世羅高校陸上部員

ウ 資料全文

「心のたすきをつなぐ」

大介は、小さいころから走ることが大好きだった。中学校では陸上部に入り、練習を重ねていった。自己記録をこう新するたびにますますやる気になり、練習にも力が入った。

大介の住んでいる町には、駅伝で有名な世羅高校がある。これまで何度も全国大会に出場し、何度も優勝をしたことがある。

「自分も、高校生になったら全国高校駅伝に出て、京都の町⁽¹⁾を走ってみたい。」
と思うようになった。

高校に進むとき、大介はまよわず世羅高校を選び、陸上部に入った。

高校に入ってから大介は、「全国大会に出る。」という目標に向かい、一生懸命練習にはげんだ。世羅高校の陸上部には、同じ目標に向かってがんばっている仲間がたくさんいた。仲間たちががんばっているすがたを見ると、「自分もがんばるぞ、負けるもんか」とやる気がわいてきた。

3年生になった。大介は、広島県予選に選手として走ることになった。大介は、全力で走り、区間賞⁽²⁾をとることができた。チームも大会新記録で優勝し、全国大会への切符を手に入れることができた。

この調子で行くと全国大会でも走ることができるかもしれない。大介のむねは期待でふくらんだ。全国大会が近づくにつれ、監督は、
「優勝しよう、今年は勝ちに行く。」

と言われるようになった。

「選手になってもならなくても一人一人が目標を持ち、強い気持ちで練習をしなければ、優勝はねえない。」

とも言われた。勝ちたい思いは大介も同じだった。

「先ばいたちができなかった優勝。自分たちが三年生になったときに必ず優勝する。」

仲間たちと、いつも話してきたことだった。

いよいよ、メンバーの発表の日がやってきた。大介は、期待と不安の中、自分の名前がよばれるのを待った。だが、メンバーの中には大介の名前はなかった。大介は、補欠として走る準備をしながらも、五区の選手のサポートにまわることになった。

「陸上部員全員で優勝を勝ち取ろう。一人一人、何ができるかをよく考えてくれ。」

監督の声が、どこか遠くから聞こえてくるような気がした。大介は、監督の言葉を聞きながら、こぼれてきそうな涙をぐっところらえた。

次の日もいつも通り練習があった。練習しなければいけないことは分かっているのに、足が前へ進まなかった。

「練習しても、全国大会で走れないのに・・・。」

大介は、グラウンドに立ち、仲間たちが練習しているのを見つめていた。その時、選手の一人が通りがかりに大介のかたをぽんとたたいた。

「大介、ありがとう。」

思いがけない言葉だった。「いっしょに練習しているだけなのに、自分が役に立っているのか？」

「そういえば・・・・・。」

予選の日は雨だった。コンディションの悪い中走るのは大変だったが、それほど心配はしていなかった。サポート役の仲間が、大介達選手が安心して走れるように、大会コースの下見に行き、実際に走り、道路の状態や走りやすいコースを教えてくれていたからだ。その上、雨の中、大介の荷物の運搬や飲み物の準備、天候や風向きの確認をしてくれた。いつもそばにつきそってくれ、心強く感じていた。

「ぼくが走る時、いつも仲間がいてくれたんだ……。」

「もう練習は始まっているぞ。みんなが待っているから、早く行こう。優勝するんだろう。」

「それは分かるけど、おまえはくやしくないのかい。もう、たすきをつなげないんだぞ。」

「何言ってるだよ、ぼくたちだって、ちゃんとたすきをつないでいるじゃないか。」

そう言う、あたりまえのように、練習している仲間たちのところへもどって行った。

「ぼくたちもたすきをつないでいる・・・・・・そうか！」

大介は、大きくうなずくと、はずむような足どりで仲間たちの方へ走って行った。

平成21年12月20日、全国高校駅伝競走大会で、世羅高校は六度目の優勝^{ゆうしょう}を果たす。大介は、選手としての準備^{じゅんび}をしながらも、五区の選手のサポートにまわった。コースの下見を行い、選手の荷物を持ち、レース前にはげました。

大会が終わった後、^{かんせい}歓声にわく^{きょうぎ}競技場で、大介は、こうインタビューに答えている。

「自分が走るより、チームが優勝することの方がうれしいです。」

大介の心からの思いだった。

翌日。優勝^{ゆうしょう}の歓喜^{かんき}にわく世羅^{せら}の町で、優勝^{ゆうしょう}パレードが行われた。パレードの先頭のオープンカーで、優勝^{ゆうしょう}旗をほこらしげに持つ大介のすがたがあった。



(1) 1950 年から始まった大会で、1966 年から 現在の都大路（京都）が舞台となった。
(2) 各区間を最も速いタイムで走ったランナーに与えられる賞。（※男子は 7 区間）

月刊陸上競技 2010 2月号 講談社
陸上競技マガジン 2010 2月号 ベースボールマガジン社
中国新聞 平成21年12月21日付

エ 授業展開例 ー学習指導案（略案）ー

仲間とのつながりを意識し、自分の役割を考える展開A
～ 「たすきをつなぐ」のキーワードに着目した指導 ～

(ア) 主題名 役割と責任の自覚 4－(3)：小学校高学年

(イ) ねらい 全国高校駅伝大会に出ることを目標に努力をしてきた大介が、チームの優勝のためにがんばろうと決意したときの気持ちを考えることを通して、集団の一員としての自分の役割を自覚し、集団の向上のために頑張ろうとする心情を育てる。

(ウ) 資料名 「心のたすきをつなぐ」

(エ) 学習指導過程

	学習活動	主な発問と児童の心の動き	留意点 (☆評価の観点)
導入	1 たすきを見て、知っていることを話し合う。	○ 何に使うのでしょうか。 ・駅伝のたすきだ。 ・選手がつないでいくものだ。 ○ たすきをつないでいる映像を見る。	○ たすきのもつ意味、たすきをつないでいくことの大変さを感じ取らせる。
展開	2 資料を読んで考える。	○ 「監督の言葉を思い出しながら、こぼれできそうな涙をぐっとこらえた大介」は、どんな気持ちだったでしょう。 ・一生懸命練習をしてきたのに。 ・ぼくは走れないけど、優勝したい。 ・走れないぼくに何ができるのだろう。 ○ 自分が選手として走った時のことを思い出した大介はどんなことを考えたでしょう。 ・仲間たちがいつもそばにいてくれて安心して走れた。 ・サポートしてくれる仲間がいたからたすきをつなぐことができた。 ◎ 大介は、仲間たちの方へはずむように走って行きながらどんなことを思っていたでしょう。 ・サポートとしてのたすきをつないでいこう。 ・ぼくも仲間の一人なんだ、優勝に向けてがんばろう。 ・みんなと一緒に練習することで、チームが優勝できるかもしれない。	○ 「たすきをつなぐ」意味を考えさせるために、資料名は最後に提示する。 ○ 「選手になってもならなくても」という監督の言葉に目を向け、チームの一員としての在り方についても考えさせる。 ○ ペアで考えを交流する。 ○ 仲間たちがともに練習し、支えてくれたおかげで走ることができていたことに気付かせる。 ○ 「走らなくてもたすきをつないでいる」とは、何を指しているのか考えさせる。 ○ ワークシートに考えを書かせ、交流する。 ○ 価値ごとに整理し、意図的指名を行う。 ☆ 書く活動を通して、「たすきをつなぐ」という意味を自分なりにとらえ、チームの一員として前向きに自らの役割を果たそうという大介の考えを推し量ることができたか。
	3 自分の生活を振り返る。	○ あなたが、集団の一員としてがんばっていることは何ですか。 ・スポ少の野球で、試合には出られないけど、声をしっかり出して雰囲気作りをしている。	○ 事前に児童からアンケートをとっておき、それを紹介する。 ○ みんなをまとめたり、助けたりしていることを中心に出させる。
終末	4 メッセージを聞く。	○ 大介君からのメッセージを聞きましょう。 ・大介は、サポートを自分の役割としてがんばったから、優勝してうれしいと思ったんだ。 ・陸上部全員が心をつ一つにして頑張ったから優勝することができたんだ。	○ 全国大会後の満足感を伝え、一人一人が集団の一員としてがんばることが優勝という結果につながったことを感じ取らせる。

自己の役割や責任の自覚から、集団の目標達成について考える展開B

～ 役割を果たした後のすがすがしさに着目した指導 ～

(ア) 主題名 役割と責任の自覚 4－(4)：中学校

(イ) ねらい 「そうか」とうなずいたときの大介の気持ちを考えることを通して、集団の一員として自分の役割や責任を果たすことが、集団の目標達成につながることを理解し、仲間と協力し合って集団生活の向上に努める態度を育てる。

(ウ) 資料名 「心のたすきをつなぐ」

(エ) 学習指導過程

	学 習 活 動	主な発問と生徒の心の動き	留 意 点 ☆評価の観点
導 入	1 映像を見て、感想を交流する。	○ DVDを見て、思ったことを交流しよう。	○ 映像を見ることにより、世羅高校陸上部をより身近に感じることができるようにする。
展 開	2 資料を読んで考える。	○ 駅伝のメンバーから外れた時、大介はどんなことを思ったでしょう。 ・何で、納得できない。 ・あんなに頑張ったのに、信じられない。 ・くやしい。 ◎ 「そうか!」とうなずいた時、大介はどんなことに気付いたのでしょうか。 ・選手だけがチームのメンバーではない。 ・選手経験がある自分だからこそ、できることがある。 ・走る選手の不安をなくせるように頑張ろう。 ・部員みんなが心を一つにしないと優勝はつかめない。 ○ 優勝パレードで優勝旗を持った時、大介はどんな気持ちだったでしょう。 ・優勝できて本当によかった。 ・自分もチームの役に立てた。 ・陸上部全員で勝ち取った優勝だ。 ・自分ができることは全部やりきった。 満足だ。	○ 駅伝のメンバーから外れ、やるせない思いの大介の気持ちに寄り添わせる。 ○ 弾むような足取りに着目させ、大介の決意について考えさせる。 ○ ワークシートに考えを書かせ、交流する。 ☆ 自分の属する集団の意義を理解し、集団生活の向上と自己の実現との関係性について、自分なりに考えを深めることができたか。 ○ 写真を提示する。大介が笑顔なのはなぜか考えさせる。
	3 自分の生活を振り返る。	○ あなたが今、集団の一員として頑張っていること、または、これから頑張ってみようと思っていることはありますか。 ・クラブ活動で、まだ試合には出ることができないけど、みんなと一生懸命練習して、チームが勝てるように頑張りたい。	
終 末	4 メッセージを聞く。	○ 大介君からのメッセージを聞きましょう。 ・大介は、サポートを自分の役割としてがんばったから、優勝してうれしいと思ったんだ。 ・陸上部全員が心を一つにして頑張ったから優勝することができたんだ。	○ 全国大会後の満足感を伝え、一人一人が集団の一員としてがんばることが優勝という結果につながったことを感じ取らせる。

(才) 資料分析表

[illegible]

(力) 板書例 (展開A)

心のたすきをつなぐ

大介 世羅高校陸上部
全国大会が夢

「ぼれてきそうな涙をぐっぐこらえた。」

がっかりだ。
選手になりたかった。
チームのためには仕方がない。
走れないけど、優勝したい。
走れないほくに何ができるんだろう。

選手として走った時のことを思い出した。

いつもそばにいてくれて安心
下見してくれた
走ることだけを考えていればいい
ありがたい
サポートしてくれた
一緒に練習して声をかけてくれた

「ちゃんとたすきをつないでいるじゃないか。」

大きくうなずくとはずむように走っていった。

サポートをすることも大事な仕事だ。
ぼくも仲間の一人なんだ、優勝に向けてがんばろう。
チームで勝つために、ぼくもがんばろう。
選手をサポートすることでたすきをつなこう。

がんばっていること
野球部で 気合いが入るように、大きな声で
学級で みんなが楽しくなるように

インタビューを受けている写真

優勝パレードの写真

優勝シーンの写真

【板書の構成】

板書は、大介の気持ちの変化が視覚的にとらえられるようにする。そのために、児童の発言を価値ごとに、短い言葉で整理分類して書くようにする。

駅伝のメンバーから外れた場面では、落胆した気持ちを表すために黒板の低い位置に思いを書き、仲間の言葉や選手として走ったときのことを思い出す場面では、思いを少しずつ上げて書くようにする。

また、キーワードとなる言葉や発問に関わる言葉を短冊で表し、児童が考えるときの手がかりとなるようにする。

(2) 活用のポイント

世羅町は、駅伝のさかんな町である。児童生徒の中にも駅伝の経験がある子もいれば、応援をした経験がある子もいる。全国高校駅伝がある時期になると、町のあちらこちらに「世羅高がんばれ」というのぼりが立ち、児童生徒にとって益々身近に感じることができるようになる。

駅伝と言えば、「選手がたすきをつないでいき、タイムを競う競技」ととらえられるほど、競技に出場する選手があらゆる面でスポットライトを浴びる傾向にある。

しかし、選手の回りには、選手の走りを支えている仲間たちがいることを忘れてはならない。選手たちが安心して走れるように、また、走ることに専念できるように、部員みんなで支えているのである。すなわち、駅伝で選手として走れるのはたった7名であるが、たすきは、部員みんなの手に渡り、部員みんなでつないでいっていると言えるのである。

この「心のたすきをつなぐ」では、選手7名がつかないでいくたすきではなく、陸上部全員でつかないでいっている「心のたすき」について考えさせたいと考えた。部員一人一人が、自分のできることを考え、自分の役割を果たしてこそ、集団の目標は達成できるということや自分の役割を果たすこともまた、たすきをつないでいることになり、自己の実現につながるということを考えさせるため、「たすきをつなぐ」にこだわり、キーワードとした。

「集団の一員としての自分の役割を自覚し、集団の向上のために頑張ろうとする心情を育てる」というねらいを達成するために、次の4点の工夫を取り入れた。

ア 発問の工夫

大介がサポートをする側からの役割の大切さや、それを全うすることにより満足感を感じていることに気付くよう、集団と個人との関係性に着目し、発問を構成していく。

イ 実物や映像の活用

たすきにこめられた部員たちの思いや、つないでいくことの難しさ、つなげた時の喜びなどを気

付かせるため、導入でたすきを提示したり、DVDでたすきわたしの場面を見せ、話し合わせるようにする。

ウ 書く活動の工夫

中心場面において、考えを整理したり、より深く考えさせたりするために、書く活動を取り入れる。仲間たちとのつながり、選手として走ったときの回想シーンなどを思い起こし、つないでいるものは何なのかを考えさせていきたい。

エ 資料名の提示

「走らなくてもたすきをつないでいる」の意味を深く考えさせるために、資料名を最初に提示せず、終末で提示する。

(3) 授業の実際—児童生徒の反応を踏まえて—

ア 発問の工夫

選手に選ばれなかった場面では、大介のくやしさをやるせなさをとらえることができた。スポーツ少年団に所属している児童の中からは、「自分にできることをしよう」という意見も出された。

「そんなにすぐに、わり切って考えることができますか。」と切り返したところ、「すぐにはわり切れないけれど、チームのことを考えなければいけないと思うから。」と、チームに目を向けた答えが返ってきた。

仲間との関わりや、選手として走ったときのことを思い出す場面では、「サポートをしてもらってありがたいと思った。」「サポートをしてくれた仲間たちがいてくれたから安心して走れた。」等、仲間たちの存在に目を向けた意見が多く出された。

そして、中心発問では、「ぼくたちだって、ちゃんとたすきをつないでいる」という言葉に目を向け、チームのために自分にできることをしようとする意見が多数出された。陸上部の部員の一人としての役割を果たすことがたすきをつなぐことであり、部員全員でつかないでいってこそチームの目標が達成できるのだということに気付くことができた。そして、大介が担ってきた役割の大切さやそれを自分の責任として全うした姿から、大介もまた陸上部員の一人として優勝に関わる大切

な一員だったことを感じ取ることができたのではないかと思う。

これらのことから、駅伝は個人の努力も大切であるが、チームとしてみんなでたすきをつないでいくことが大切であることをとらえやすい発問構成になっていたのではないかと考える。

イ 実物や映像の活用

導入で実物のたすきを見せることで、駅伝をイメージしやすく、また、「たすきをつなぐ」ということを意識して学習に入ることができた。

たすきをキーワードとし、こだわった結果、中心発問の中で、大介たちがつないでいるのは「たすき」そのものだけでなく、「心のたすき」をつないでいる、と考える児童もあり、ねらいに迫るために効果的であったと考える。

また、資料後半で、優勝旗を誇らしげにもつ大介の表情を見ることにより、チームの一員として役割を果たした満足感にせまることができた。

ウ 書く活動の工夫

中心場面において、考えを整理したり、より深く考えさせたりするために、書く活動を取り入れた結果、仲間の一人が言った「ぼくたちだって、ちゃんとたすきをつないでいる」という言葉に目を向け、チームのために自分にできることをしようと考える意見が多数出された。

「心のたすきをつないでいこう」と記述していた児童に対しては、「心のたすきとは、どんなことを指すのだろう。」と補助発問を投げかけた。「みんなで心をつなにして、練習をしていくこと。」「チーム全体で支え合ったり、励まし合ったりしていくこと。」という答えが返ってきた。

＜児童のワークシートの記述から＞

- ・全国大会で走る人をサポートして、万全の状態で走ってもらおう。
- ・ぼくが落ち込んでいたらみんなが落ち込んでしまう。仲間がいたから1位が取れたんだから、練習を一緒にしよう。
- ・ぼくもチームの一員だから仲間を支えてみんなで一緒に優勝しよう。

- ・ぼくだって5区の人のサポートがちゃんとできたら、りっぱにたすきをつなぐことができる。サポートの人がいてこそ走れるから、ぼくもがんばろう。
- ・ぼくたちがつないでいるのは、チームを支える心のたすきなんだ。

書くことにより、ねらいに迫ることができたのではないかと考える。

エ 資料名の提示

資料名を最初に提示せず、「たすきをつなぐ」にこだわって展開していったところ、児童から「心のたすきをつないでいこう」という意見が出された。「心のたすきとは何だろう」と考えを深めることができた。

(4) 各教科等（体験活動を含む）との関連

高学年では、学校での委員会活動やクラブ活動、地域のスポーツ少年団などの集団活動を通して、責任ある役割を受けもつ経験を多くさせておきたい。

リーダーとして活躍するだけが集団の役割を果たしているのではなく、例えば、学校での集団活動では、全校が安心してスムーズに活動できるように支えていくことも大切な役割であると実感できる機会や場の設定は、高学年としての役割を果たそうという意識の醸成に役立つものとする。

(5) 心のノートの活用

集団の中で役割を自覚し、責任をもとうとすることをねらいとした道徳の時間の導入において、「心のノート」PP.88-91, PP.114-115が活用できる。「わたしが参加している集団とその役割」を記入させ、自分の所属している集団と役割について意識させることにより、その後の話し合いを深めることが期待できる。

委員会活動、クラブ活動、縦割り班活動などにおいて、全校をリードする立場に立つときに「心のノート」PP.88-91が活用できる。自分の所属する集団をよりよくするためにできることは何かを書かせ、節目節目でふり返りをさせると効果的である。

教材活用例(5) 「風を感じてー侍ハードラー 為末大ー」 〔中学校第2学年 主題：生きる喜び 内容項目：3の(3)〕



(1) 開発資料の実際

ア 素材の説明

(ア) 素材の概要

〈素材—^{ためすえだい}為末大さん—について〉

為末大さんは、ハードルの陸上選手である。世界陸上400mH（ハードル）で日本人初の銅メダルを獲得した。与えられた身体的な条件のもと、工夫して世界に通じる走法を生み出し、著書も出版している。

現在、アスリートたちをつなぎ合わせる組織を立ち上げている。



昭和53年 (1978年)	広島市佐伯区に誕生
平成5年 (1993年)	ジュニアオリンピック200m走日本中学記録
平成8年	200m走で後輩に敗れる。 インターハイ400m走・400mH日本高校記録
平成12年	日本学生選手権400mH日本学生記録 シドニーオリンピック予選出場
平成13年	エドモントン世界陸上日本記録 銅メダル獲得
平成16年	アテネオリンピック準決勝（ハードル日本人初出場）
平成17年	ヘルシンキ世界陸上 銅メダル獲得
平成20年	日本選手権優勝 北京オリンピック予選出場

為末大さんの経歴

(イ) 4コマ絵

著書やインタビューに基づいて、経歴を整理した。そして、為末さんの考え方や生き方が表れ、人間の魅力が伝わるエピソードを中心場面とし、それらの全てが生きる喜びであるということが伝わるように、場面を設定した。

	起	承	転	結
場面のイメージ絵				
絵の説明	小学校の時、駆けっこで1番になり決勝テープを切る。カール・ルイスがオリンピックで優勝する姿に感銘を受け、彼のようになりたいと決意する。	いつかは誰かに負けると思っていたが、高校時代について短距離走で後輩に負けて、トラックに1人仰向けになってしまう。	ハードルに活路を見出し、工夫と練習で、課題を克服していく。世界陸上では、日本人初の銅メダルを獲得する。	与えられた身体的な条件のもと、工夫しながらよりよくしていくことに、喜びと生きがいを感じ、充実した生活を送っている。

イ 資料の解説

【作成の要点】

中学生は多様なことに関心を抱き、ものごとの受け止め方や考え方も多様である。しかし、自己について、特に生きることについて深く考え、生きる喜びを感じているのだろうか。この時期に、自分の本当に求めるものについてしっかり考え、それに向かって努力することを楽しいと捉えることができれば、もっと自他を大事にして幸福を感じられるであろう。そこで、「生きる喜び」やそれを支える「目標への努力」・「感謝」などをねらいとした。

「生きる喜び」とは、困難にあっても乗り越える強さがあって、初めて味わうことができる。目標があり、それに向けての努力がなされ、さらにそれらを取り巻く全てに対する感謝の念があって、たどり着けるものである。為末さんの目標は、初めは勝つことであったが、長じるに伴って工夫と練習で課題を乗り越えていくことへと昇華されていった。生まれた国や、それを育む文化全体への感謝の念も、「生きる喜び」を強めている。

為末さんは人より成長が早かったこともあり、走るのが速かった。小学生の時に地域のスポーツ少年団に入って、練習に励んだ。いつも1番であることが当たり前で、中学生のときには記録保持者となった。15歳で成長が止まり高校生になって、いつかは人に抜かれると思いつつも、短距離の練習に励んでいた。県大会では、ついに後輩に負けてしまった。それは、限界を自覚することであり、同時にハードルに転向する契機でもあった。

自己を見つめて、さらにより高い目標を設定し、それに向かって工夫と努力を続けるという為末さんの姿は、生徒にとって、励みになることと思われる。また、充実した生き方をすると、困難こそが喜びを大きくするという事に気付けば、人として充実した人生を送ることができるであろう。機会を捉えて、常にその種まきをしていきたいものだ。

生徒はハードルについて、保健体育科で学習する。その知識を活かして授業を展開すると、理解が易しくなると考えられる。また、スポーツニュースなどで取り上げられるタイミングで行うのも好ましい。道徳通信や学級通信などで、授業の様子や生徒の感想などを紹介して、家庭でも話題にしてみようと、さらに効果的である。



【心に響くちょっといいはなし】

為末さんは、「駆けっこの神童」と呼ばれていた。中学三年生（15歳）時の200m走（21秒36）は、憧れのカール・ルイス（同年齢）よりも、速かった！

シドニーオリンピックでは、予想外の風にあおられて、転倒した。大会での初の転倒だった。その後、国外では会場によって風の吹き方が違うことを知り、それからは風などを計算に入れて競技に臨むようになった。

アスリートの多くは、日本では企業に所属しているが、世界では、一人で試合に臨みその結果に応じて、いわば賞金を稼ぐ。ぎりぎりの勝負精神を養うために、為末さんは企業を退職して、コーチもつけず、一人で世界各国の試合に出場して生活している。

また、クイズ番組で、一千万円を獲得した。陸上に親しんでもらおうと、東京都とタイアップして、一般道路で競技する「東京ストリート陸上」というパフォーマンスに、その賞金を使った。

現在、『為末大オフィシャルサイト「侍ハードラー」』というブログを立ち上げており、たくさんのファンの投稿が寄せられて、心のつながりを感じる交流の場になっている。

平成22年（2010年）10月からは、アスリートたちと社会をつなぐ社団法人「アスリートソサエティ」を立ち上げている。開演の挨拶は、現役で練習を続けているため、現住所であるアメリカからのテレビ電話でなされ「選手と社会をつなぐ場に」というメッセージが発せられた。

「風を感じて」 —侍ハードラー 為末大—



広島市に足の速い少年がいた。為末大だ。

駆けっこは、いつも一番。

小学生のときに、陸上のスポーツ少年団に入った。全力疾走すると、自分がむき出しになるような気がする。我を忘れる心地よさだ。

中学一年生のとき、カール・ルイスがオリンピックで、人類初の記録を出した。カッコいい。速く走ることなら絶対に負けない。

このとき、「カール・ルイス計画」が始動した。

中学の陸上部へ入るときは、松葉杖だった。顧問の河野先生は、シャフトを使って腹筋や背筋を鍛える指導をした。為末は、ゴールテープを切る場面をイメージし続けた。

三年生になると、中学校全日本選手権の100m走と200m走で中学生日本一になった。だが、カール・ルイスのように「飛ぶように走り、ゴールを風のように駆けぬける」という、めざす走り方ができなかったと振り返る。終盤の失速を課題としていたのだ。思いは世界へ、そして理想の走り方へと向けられていた。

高校でも陸上を続けた。それは故障との戦いでもあった。また、15歳で体の成長が止まってからは、伸び盛りのライバルたちを、恐れていた。トラックで負けるなどということは、全人格を否定されること……。

高校三年生の県大会、200m走決勝でのことだった。ウォーミングアップやストレッチをし、いつものように準備を整えて、やや緊張しながらスタートラインに並んだ。号砲とともにダッシュし、全力で走った。だが、後ろからだんだんと地面を蹴る音が近づいてくる。息づかいが、もうすぐ隣に聞こえる。そうして、ふっと前に人の肩が出て、見る間に抜かれた。それからは、ゴールまでその背中が遠ざかっていくように感じられた。一瞬の出来事だったのだろうが、スローモーションを見るように、とてもゆっくりと感じられた。風が、止まっていた……。

それは、世界の大会でも国の大会でもなく、地元の広島地区でのこと。しかも相手は、同じ年でもない、高校の後輩だ。為末は、生きる場ともいえるフィールドに、四肢を投げ出して力なく仰向けになった。

「え？ 為末が負けた？」

「これって、初めての敗北じゃないの？」

「でも。また次、頑張ればいいよ。」

「もう無理かも。背もほかの人より、頭一つ分低いしね。」

「あのまま、動かないのかなあ。」

競技場の人たちは、口々に言い合った。

雲が空を覆い、風がざわめきを運び去っていく。

インターハイ⁽¹⁾では、監督の指示で、400m走に出場した。そして、優勝。

だがこれも、誰かに抜かれる日がくるかもしれない。もっと自分に向く種目はないか……。

目に留まったのが、ハードル。困難が多いほど、工夫次第で勝負できそうだ。

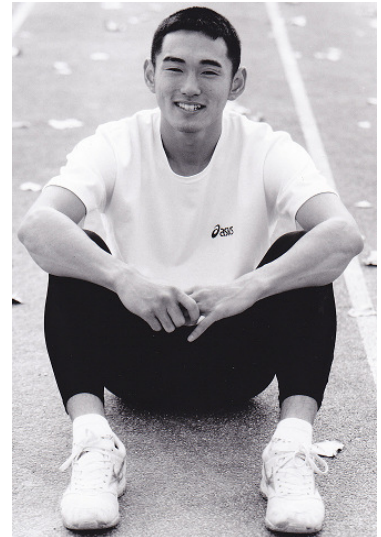
国体⁽²⁾では、400mハードルに出場し、何と、優勝した。しかも日本高校記録だという。世界のジュニア記録でも、歴代二位だ。今もこれを破るのは、至難の業とみられている。

それ以来、十年以上も、高さ91.4cmのハードルが35m間隔で10台並ぶこの競技に、全てを懸けている。

為末は、その後、オリンピックに三回出場し、世界陸上では、二回銅メダルを獲得した。ハードルの決勝で日本人がトラックに残ること自体が初めてだった。

カナダ・エドモントンでの47秒89というタイムは、日本記録だ。

人は、彼を「侍ハードラー」と呼ぶ。スタートから思い切り疾走するため、他の走者は為末の背中を見ながら走ることになる。走りっぷりの潔さが、「侍」と称されるゆえんだ。



為末は、語る。全てが、おもしろいと。

自分は、世界一を狙える身体を備えてはいない。アフリカ系のようなバネがあったら……と何度も思いながら、その度に自らを戒める。この国に生まれ、この文化の中で育ったからこそ、こんなに充実した陸上人生を送ってこられたのだ。

まず、走り方の意識を変える。前屈みになり、倒れそうになる寸前に足を出す。欧米人は骨盤が正面を向いているが、日本人はやや上を向いている。上に逃げがちな力を無駄なく前へもっていくためには「下へ押さえ込む意識」が必要だ。つまり「生まれ持った骨格のために足が遅い」という現実には、「その点を修正すれば足が速くなる」という可能性のことなのだ。

次に、体をどうやって最大限に生かすかを考える。1000分の1秒でも速くなるために、どんなトレーニングをして、どんな体の動かし方を会得するか。五感を信じて、神経を研ぎ澄まし、技を高めていく。これは、典型的な職人気質⁽³⁾の日本人流である。楽しいやり方を知ってしまった。体任せの競技人生など満足できない。100に生まれついた身体能力の者が、75しか発揮できない例は多い。それなら指数50の日本人は、何とか工夫して75まで上積みしていけばいい。それなら対等に戦える。こんな愉快なことはないと思う。

さらに、欧米流の筋力アップをする一方で、すり足のような日本流の走り方をする。すると、ハードルを越えるとき、無駄に跳ねなくてすむようになった。

また、1年余りハードルを跳ばないという常識外れの実験をしてみる。走力があがった。

試合で雨が降れば、悪天候下での経験も積んできたこっちのものだ。各国の若い選手は力が出せないと肩を落としているが、このときこそチャンス。「勝てる」と信じて、何度もゴールまでのストーリーを思い描く。

ハイスピードで録画した映像で見ると、ハードルを越えるとき、頭が水平に推移しているのが分かる。わずか0.3秒の間に、跳ね上げた足を弛緩⁽⁴⁾させ、蹴り上げた足がバーに当たりそうになるとこ

ろで骨盤をずらして滑るように越える。同時に次のハードルまでの歩数を、1 cm 単位で計算する。何とそのとき、一休みしているのだという。

そうやって、何万回と着地するなかで、地面についた足の上に骨盤が乗り込み、体がスーッと前に進んでいく感覚をつかむことができた。

やった。これが、走りの極意だ。

まだまだ自分には、試してみる部分がいくらでもある。

ハードルを越える息継ぎの瞬間が、心地よい。為末は、体をよぎる風を、感じるという。



「東京ストリート陸上」の一場面

【注】

- (1) 全国高等学校総合体育大会のこと。競技種目別の学校対抗で、年に2回、夏季と冬季に開催される。陸上競技は夏季大会で行われる。
- (2) 国民体育大会のこと。各都道府県持ち回り方式で毎年開催されており、第3回から都道府県対抗となり男女の総合優勝にはそれぞれ天皇杯と皇后杯が授与されている。
- (3) 職人に特有の、頑固だが実直に究めるという性質。
- (4) ゆるみ、たるむこと。

【参考文献】

- 為末大（著）「インベストメントハードラー」講談社（2006）
為末大（著）「日本人の足を速くする」新潮新書（2007）
為末大（著）「走りの極意」ベースボールマガジン社（2007）

エ 授業展開例 ー学習指導案（略案）ー

困難を克服する為末の姿から生きる喜びについての考えを深める展開A
～ 書く活動を中心にした指導 ～

(ア) 主題名 生きる喜び 3ー(3)

(イ) ねらい 勝ち続けていた短距離走で後輩に敗れてハードルに転向し、その後の陸上人生に喜びを感じている為末の生き様を通して、生きる喜びについての考えを深め、人間として生きることの喜びを見いだそうとする道徳的心情を養う。

(ウ) 資料名 「風を感じて ー侍ハードラー 為末大ー」

(エ) 学習指導過程

	学習活動	主な発問と生徒の心の動き	留意点 (☆評価の観点)
導入	1 自分の夢を考える。	○ 自分の夢は何だろう。その実現のためにはどうしたらいいだろう。 ・志望校に合格する。勉強する。 ・希望の職業に就く。努力する。	○ 事前にアンケートを取っておき効果的に活用してもよい。
展開	2 後輩に敗れるまでを読んで、為末の短距離走にかける強い思いを考える。	○ カール・ルイス計画には、どんな思いがあるのだろう。 ・世界で勝負し、金メダルを獲る。 ○ 後輩に負けたとき、どんなことを考えていたのだろう。 ・悔しい。ショックだ。 ・全人格を否定された。	○ 為末の短距離走への強い思いを確認させる。 ○ ワークシート1に記入させる(発表に際して挙手がないときは色カードを配付し、「この後短距離走を続けるか(青)、続けないか(赤)」に色分けして掲げさせても良い)。
	3 資料後半を読んで、為末の生きる喜びについて考える。	○ 「全てがおもしろい」と言っているが、どんなことが面白いのだろう。 ・工夫して速く走ることになること。 ・雨など悪条件は、勝機と捉えること。 ◎ 「風を感じて」走る為末は、どんな思いなのだろう。 ・風と一体になったようだ。 ・ハードルと出会って良かった。ずっと陸上を続けていこう。 ・与えられた体を、工夫によって世界と戦えるようにするのは楽しい。	○ ワークシート2に書かせて自分の考えをはっきりさせる。 ☆ 人間には弱さがあっても、それを乗り越えていける気高さがあるということを理解し、自分のこととしてとらえているか。
	4 自分の生き方を振り返る。	○ 為末の生き方と自分の生き方を関わらせて感想を書こう。 ・ショックを味わった方が、努力して喜びが大きくなる。 ・同じ事も、意識の持ち方で、幸福に感じるものなのだなあ。 ・自分も、目標に向かって努力し、幸せになるように生きていきたい。	○ ワークシート3に書かせて為末と自分とを重ねて見つめさせ、ねらいに迫る。その際、体育祭や合唱祭、部活動など、苦勞するほど喜びが大きくなっていった体験を想起させる。
終末	5 教師の説話を聞く。	○ 「蓮、泥中より出でて芳し」の話を聞こう。 (泥を汚いと受け止めるか、有り難いと受け止めるか。生きる喜びとはどんなことか。)	○ 余韻をもって終わらせる。

「充実した陸上人生」という言葉に着目し、感謝して生きる為末の姿を通して
ねらいに迫る展開B ～ 話し合い活動を中心にした指導 ～

(ア) 主題名 感謝 2－(6)

(イ) ねらい 世界の陸上競技で金メダルを獲ることは身体的に困難だが、日本に生まれたことに感謝し工夫と努力で競技人生を送る為末の姿を通して、感謝についての考えを深め、それを大切にしようとする道徳的心情を養う。

(ウ) 資料名 「風を感じて 一侍ハードラー 為末大」

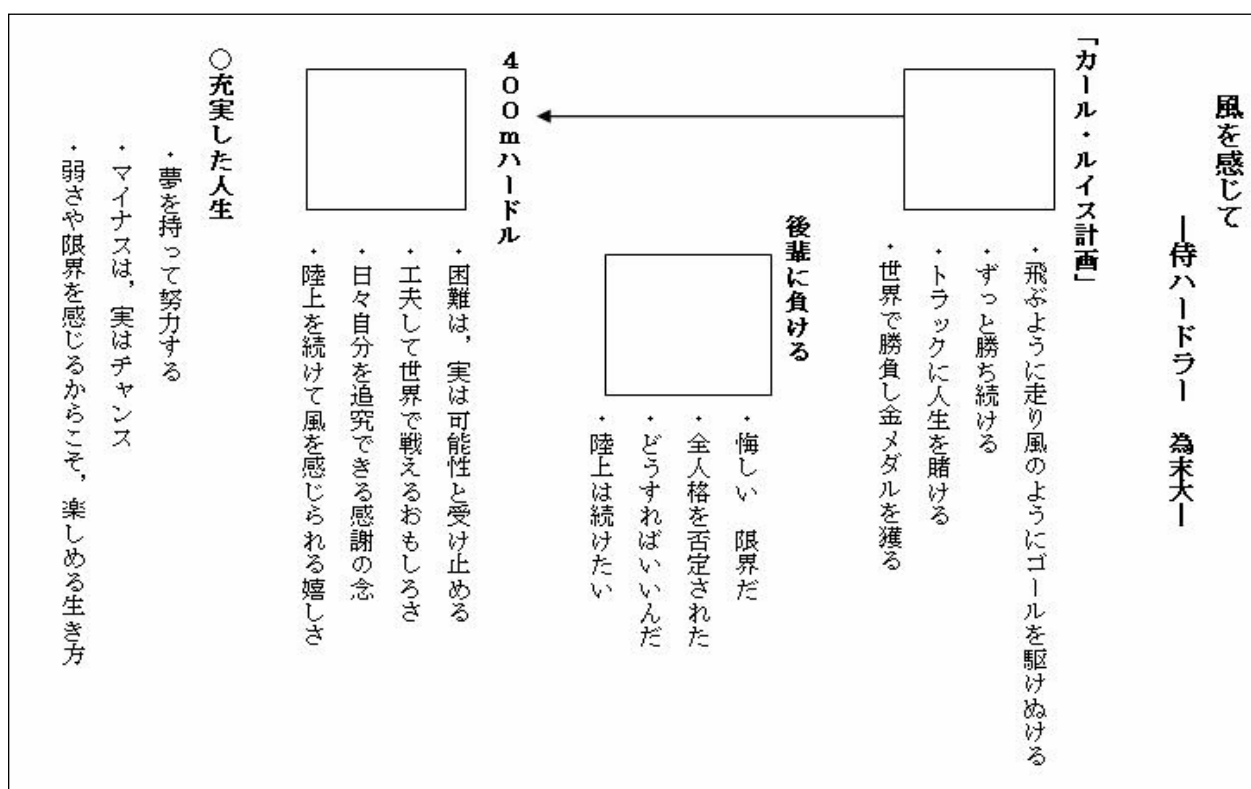
(エ) 学習指導過程

	学 習 活 動	主な発問と生徒の心の動き	留 意 点 (☆評価の観点)
導 入	1 陸上競技について想起する。	○ 400mハードル走とは、どんな競技だっただろう。	○ 保健体育科の学習と関連付けて、資料への興味付けをする。35mの距離を確認する。
展 開	2 短距離走で後輩に負けるまでを読んで、為末の気持ちを考える。 3 「充実した陸上人生」という為末のことばには、どんな思いがあるかを考える。	○ 短距離走で後輩に負けてトラックにうずくまった為末は、その後陸上を続けるだろうか。 ＜やめる＞ ・やはり負けた。もう勝ち目はない。 ・勝てないのなら、自分ではない。 ・全人格を否定された。 ＜続ける＞ ・ずっとやってきたので、このままではやめられない。 ・どこがいけないか反省して、さらに速く走る練習をする。 ・他の種目もやってみる。 ○ 銅メダルを獲得したときの気持ちを話し合おう。 ・種目は変えたけど、続けて良かった。 ・昔からの目標が達成できて嬉しい。 ◎ 「充実した陸上人生」という為末のことばには、どんな思いがあるか。 ・日本に生まれその文化に育ったおかげで今の自分がある。 ・「侍」の潔さが自分の走りに備わっていることを誇らしく思える。 ・もし日本人でなかったら、走り方を工夫してという楽しみを味わえなかっただろう。 ・日本流の職人気質が身に付いていることに感謝している。 ・たくさんの人のおかげだから感謝している。	○ 為末は陸上を止める(右)か続ける(左)か、黒板にネームプレートを貼って意思表示させ(中心ほど迷いがあり、離れるほど強いという強弱をつける)、その理由を発表させる。 ○ 付箋紙に書いて、少人数のグループで一人ずつ台紙に貼り出しながら、考えを言わせていく。 ○ 補助発問などにより、家族等応援や支援をしてくれる人まで幅広く考えさせていく。 ☆ 充実感の根底にあるものを自分なりに考え、為末の感謝に対する見方や考え方を自分なりにとらえることができたか。
終 末	4 教師の説話を聞く。	○ 話を聞き、感想を書こう。	○ 成功体験でも失敗体験でも良いが、感謝につながるよう留意する。

(才) 資料分析表

競技場面	登場人物の行状	主人公の心情	生徒の意識の流れ
○駆けこぎ	・いつも一徹。 ・スガ少で練習する。	駆けっこ ・全力疾走すると自分からも出しこなる快感があるなあ。	・走ることが好きなんだな。 ・自分にも好きなことがある。
○カール・ルイスが100m走で金メダル獲得。	・カール・ルイス計画を立てる。	憧れ ・格好いいなあ。 ・自分も世界で勝りたい。 ・オリンピックでメダルを獲りたい。	・カール・ルイスみたいにメダルを獲りたいんだな。 ・自分にも憧れる人物がいるなあ。
○短距離走で後輩に負ける。	・そのままグランドに仰向けになる。	敗北 ・悔しい。 ・受け入れられない。 ・全人格を否定された。 ・どうすればいいんだ。	・相当なショックなんだろ。 ・もう陸上を止めてしまおうかな。 ・全人格を否定されるとは、どんな気持ちなのだろう。
○400mハードルに転向する。	・世界陸上で銅メダルを獲得し記録を破る。	ハードル ・ハードルは工夫次第で世界と勝負できる。 ・オリンピックを目指して頑張ろう。	・陸上が生きることに同じなんだな。 ・子どもの頃の夢を達成できたんだな。 ・種目は変わっただけで、諦めずにやり続けるのは素晴らしいな。 ・自分も目標に向かって努力を続けたい。
○工夫して練習する陸上人生を送る。	・走り方の極意をつかむ。 ・限界まで試し続ける。 ・ハードルを越える瞬間が心地よい。	充実した人生 ・ハードルをやって良かった。 ・ずっと陸上を続けたい。 ・工夫と練習で世界と戦えるのはねもしい。 ・日本に生まれその文化に育ったことに感謝する。 ・充実した陸上人生を送れるのは幸せだ。 ・まだまだ試してみたいことがある。 ・陸上を止めたい。	・食けたショックが次の世界を広げるきっかけになったんだな。 ・自分を叩きめて工夫し、努力したから人生が充実しているんだな。 ・一生懸命生きるとは、幸せなんだな。 ・感謝の気持ちば、喜びを大きくするのだな。 ・辛い思いが大きいと喜びも大きくなるのだな。

(力) 板書計画



【板書の構成】

資料の前半を読んではじめに、子どもの頃からずっと一番だった場面を示し、為末の短距離走にかける姿を生徒のことばでまとめていく。また、「カール・ルイス計画」などの見出しは短冊にして貼ったり、黄色チョークで書いたりすると分かりやすい。

次に、後輩に敗れる場面をやや下にし、そのときの思いを板書する。

その後、為末さんはどうするかを考えさせてから、資料の後半を読み、400mハードルに転向して、工夫して充実した陸上人生を送る場面を左上に掲げ、その心中を発表させて視覚的に意識できるように要約する。

そして、ただ勝つことが喜びだったはじめのころと、敗北を乗り越えて日々工夫を重ねていくことに喜びを見出すようになった現在との変化を意識できるように、矢印で示す。

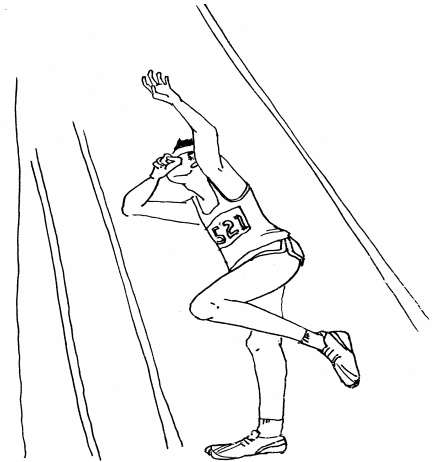
最後に、為末さんが感じている「生きる喜び」と関わらせて、自分の生き方について考えを深めることができるように「充実した人生」というキーワードでまとめる。

(キ) ワークシート

「 画を聴いて 一歩ハートに 未来へ 」

組 番 名前

- I 後書きを書いた時に心の中に湧き上がったものを未来へと、みんなに伝えてほしい。



- II 画を聴いたときの感動や思いを未来へと、みんなに伝えてほしい。

- III 未来への夢や思いを自分自身へと伝えてほしい。感動を書きな。

(2) 活用のポイント

中学生という義務教育を終えていくこの時期の生徒にとって、よりよい生き方を目指す姿勢ができれば、生きることに喜びを見いだせるだろう。そこで、陸上競技という身体的な要因が大きく左右する世界で、「困難とは可能性のことだ」と受け止めて自らを試しながら充実した人生を送っている為末さんの生き方に触れ、その思考的な追体験をさせてやりたい。

指導に当たっては、世界陸上のメダリストという自分とかけ離れた存在として受け止めるのではなく、考え方や生き方から学びたいと思わせるようにしたい。生徒は部活動や体育祭、合唱祭などで目標を掲げて取り組み、成功したり失敗したりして、限界や達成感を味わっている。そういう身近な体験を想起させながら活用していくとよい。

また、1-(2)「強い意志」・1-(5)「個性の伸長」や、2-(6)「感謝」・4-(8)「郷土の発展」・4-(9)(10)「日本人としての自覚」というそれぞれのねらいで指導展開することも可能である。その場合、その道徳的価値について、十分考え、生徒の言葉にしてみとめておきたい。

ア 発問の工夫

為末さんは実際には、挫折したことがないと言われているが、敢えて挫折というならば、陸上の王道と信じていた短距離走からハードルに転向したことが、唯一それにあたる。そこで、どんなに短距離走への思いが強かったかを発問によって明確にしておくことで、その後の陸上人生について深く考えることができる。

資料は分割して提示する。後輩に負けてから、インターハイに出場するまでに、どんなことを考えたり感じたりしているかを、しっかり考えさせたい。そのため、その部分は、意図的に記述を省略してある。生徒が、自分自身の考えをまとめ、自覚できるような発問としたい。少数だが、学級で為末さんがハードル走者であると知っている生徒もいるが、展開に添って思考を深めることができる。

ねらいに迫るために「風を感じて」練習する為末さんの心中をしっかりと考えさせ、「生きる喜び」

につなげるようにしたい。

イ 活動の工夫

「書く」活動を中心に行っているA案では、短距離走で世界を目指していたのに、広島地区というレベルでしかも後輩に負けるという、生徒にとって身近に感じられる部分で、挫折感を各個人で追体験させておき、中心発問での思考を印象付けたい。

また、体育祭や合唱祭などで頑張った分だけ達成感や充実感があることを、学級の実態に応じて想起させるとよい。例え、思い通りの結果にならなくても、体験から得るものがある。

「話し合い」を中心に行っているB案では、その時間を確保するために、事前に競技を具体的にイメージさせておきたい。例えば、ハードル間35mを廊下で示したり、ハードルの高さを教卓で示したりするなどイメージをもたせる工夫をしたい。

話し合いの手がかりとして、ネームプレートや付箋紙などで全員に意思表示させて意見を出させると、多くの生徒が発言しやすくなる。

ウ 臨場感をもたせるための工夫

○ アンケート

生きる喜びは、夢が実現すると実感しやすい。事前に、夢やそれを実現するためにしていることなどを尋ねておき、導入で活用すると内容を自分に引きつけやすくなるとともに、興味をもって内容に引き込まれていきやすい。また、題材と関連している好きなスポーツのベスト3を発表すると、身近に感じやすい。

○ 画像

場面絵を用いる。可能であれば、オリンピックや世界陸上の短距離走の決勝シーンがあると、困難な状況に挑むことから生じる生きる喜びについての理解を促しやすい。

エ まとめの工夫

生徒の多くは、夢を諦めないことや努力といった面に目が向きがちである。だが、「生きる喜び」は、それらを含む全ての過程から生じる。そのことに気付かせるための工夫をしたい。発問や書く

活動等を通して、ねらいに迫っていくが、終末のまとめとして、指導者の生き様をも踏まえたおさえをしたいものである。教師の人間性がにじみ出る説話は、生徒の心情に訴え、深い感銘を与えることができる。そのことにより、生徒はねらいの根底にある道徳的価値を一層主体的にとらえ、人間としての生き方についての自覚を深めることができるものと考ええる。

A案では、蓮が泥から咲き出ているながら芳しいということを取り上げ、同じ泥も、汚いと受け止めると嫌な存在であるが、栄養源ととらえればありがたい存在となるという、受け止め方の示唆をして余韻をもって終われるような展開とした。その他体験談など、適切な説話を取り入れることも効果的である。

また、授業後に生徒がしっかりと考えたことについて肯定的に評価することも大切である。心のノートの活用や、学級通信での紹介も行いたい。

(3) 授業の実際

ア 発問の工夫

為末さんは、敗北を契機に転向して充実した生き方に至っているのです、敗北感に共感させるためにカール・ルイス計画への思いについて発問した。生徒たちは、ボルトをよく知っているのです、援用するとイメージしやすかったようである。

中心発問では、工夫し続ける生き方の良さを考えさせた。「風と一体になって走っているような感じがして気持ちがいい。」「陸上の楽しさを知ることができた。」「いろんなことを探りながら走るのがおもしろい。」「技を高めていくことの楽しさを知った。」「自分の体をどうやって最大限に生かすかを考えている。」などの肯定的な反応が多かった。

イ 活動の工夫

「書く」活動を中心にしたA案の後輩に敗れたシーンでは、「プライドが傷ついて悔しい。全人格を否定され生きがいをなくした。もう陸上はしたくないと投げ出した。」という反応が多かった。

「話し合い」を中心にしたB案の同じシーンでは同様な発言とともに、「なんで負けたのだろう。自分の力不足だ。もっと練習すれば勝てたかも知れない。」という発言もみられ、「何やってるんだろう。こんなことでは、世界で金を獲るという夢はどうなるんだ。」「もっと頑張って、また勝ってやる。」という方向へまとまっていった。

ネームプレートでの意思表示は、強弱をつけた。中心軸ほど迷いがあり、左右の端になるほどそれぞれの意思が強い。その代表の三者に意見を求めるなど、意図的な指名により、多様な考えを交流することができた。

書く活動と話し合う活動を組み合わせて、実態に応じて柔軟で効果的な展開も工夫したい。

ウ 臨場感をもたせるための工夫

○ アンケート

「夢やそれを実現するためにすること」については、「行きたい高校に合格する。そのために勉強する」と、「やりたい仕事に就く。そのために努力する。資格を取る。」(3年生)が多かった。具体的な人数を発表することにより、興味をもち自分と比較して考えることができ、集中して内容に入っていくことができた。

○ 画像

はじめの勝つシーンでは、資料中の写真(中学生時)を場面絵として示した。挫折場面と風を感じながらハードルを越える場面では、本資料(1)ア(イ)「4コマ絵」を拡大し、彩色して用いた。板書がすっきりするので、「今、何を考えているか」が明確になった。また、変化を矢印で示すと、喜びが、勝つだけでなく工夫する過程の全てを意味するようになるということが、理解しやすくなった。

エ まとめの工夫

生徒の感想に、「為末さんのように、いろんなことを失敗したり、経験したりすることで、また新しいことを学ぶような生き方は、すごいと思った。私もそのような生き方がしたい。」「風を感じて走

るとき、悟りを開いたようにすがすがしく何もかもがおもしろくて楽しいと思う。為末さんが本当に楽しそう。」「楽しく自分の人生を満喫できるのが一番だと思うけど、世の中そうならないことだってある。辛いという思いもなければいけないと思う。」「自分も後輩に抜かされたけど、やめてしまった。」など、為末さんの生き様を自分に引きつけて学ぶ多様な記述がみられた。

特に、「自分も後輩に抜かされたけど、やめてしまった。」の記述は、それまでやめた理由を語ることのなかった生徒が自己を振り返り自らの弱さ吐露したものである。それは、為末さんの生き様を通して、自らの生きる意味や自己の存在価値を問い、次に進もうとするきっかけにしたものであると受け止めたい。これを手がかりに、その生徒への関わりを広げていくことができる。

授業後、「道徳通信」に、資料の内容を要約して生徒の記述を掲載した。生徒は自分の文章を探したり、人の考えを知ろうとしていた。また、他の教師と情報を共有できる。保護者は、子どもが学校でどんなことを学習し、どう受けとめているかを知ることができる。そういった積み重ねをしていくことで、子どもと保護者と教師との信頼関係を築くことにもなる。保護者の中には、3年間の子どもの記述から、その成長を実感するという方もあった。

（４）各教科等（体験活動を含む）との関連

保健体育科において、短距離走は、頻繁に行われる。ハードルの授業は、1年生や2年生で全生徒が学習する。ハードル間の歩数や、跳ねすぎないための姿勢など、実際に体験したあとに本資料で授業をすると、身近なこととして考えることができる。

キャリア教育の一環として、総合的な学習の時間に進路学習をする学校が多い。将来を見通して希望する職業やそれに就くための道のりを考えさせるときに、生き方について深く考えさせたい。人としてよりよく生きることについて常に考えさせることで、その状況や年齢に応じた答えを模索していけるであろう。そのカリキュラム全体の中に、本資料の活用を計画すると効果的である。

体育祭や合唱祭など、生徒が目標をもって取り組む学校行事では、生徒一人一人の姿や想いを見つめておきたい。必ず頑張った分だけ達成感や充実感をもつものである。可能であれば、映像を保存しておき導入や終末で活用することもできる。例えば頑張らなくて失敗しても、そのことを振り返ることができれば、それは失敗にはならない。そこから学ぶものがあるはずである。

（５）心のノートの活用

「心のノート」PP. 80-81の「かみしめたい 人間として生きる すばらしさ」を活用したい。見開きいっぱいにはさわやかな風が感じられる。草むらの少年への光は、未来を感じさせる。「生きる喜びとはなんだろう」という問いが示されている。「人間として生きること」として記された詩を見るたびに、生徒は授業で考えたことを想起することであろう。機会あるごとに開きたいものである。

